

舞天嘉燕越初冬 路隔蓬山只一重 禮樂可依殷制度 川原曾入漢提封  
徹田箕子留遺澤 戰壘唐皇沒舊蹤 省識孔融風範否 倘教膚使屬儒宗

淋漓大筆走龍蛇 驚坐陳遵未許誇 上國慚余膺白望 行人爲爾賦皇華  
三年頻有越裳譯 八月偏遲博望槎 落月屋梁縱分手 蘭芬猶結夢中花

一編家乘贈行勝 永伴青山送子行 後會何難岡異日 新交亦復愴離情  
錯刀不用英瑤報 巴里偏勞白雲底 記取海風吹雨去 岱雲曾傍兖州城

NOTICE: This material may be protected  
by copyright law (Title 17 U.S. Code)  
Provided by the University of Washington Libraries

三階某禪師行狀始末に就いて 大谷勝眞

三階教に關する研究は近時頓みに盛となつたやうであるが、教義史料の研究は矢吹博士の「三階教之研究」に於て盡され、その關係典籍文書碑銘に至るまで悉く網羅されて遺す所がないと言ふも過言でない。最近塚本善隆氏が支那佛教研究誌上に三階教關係の新資料を發表され、嘗て大屋徳城君が我が國に遺存する三階教典籍を集めて「三階佛法」として發表されたことのある外は他に資料の存するを聞かない。矢吹博士が収録された三階關係古卷殘籍類の殆んど總は敦煌石室發見にかかるもので、何れもロンドン及びパリに移されたスタイン氏及びペリオ氏の蒐集せるもので、多くの零本殘缺を雜へてはゐるが、三階關係典籍の蒐集としては最も豊富なものと言ふも過言でない。山と積まれた經卷中より一々これが檢出に當られた博士の勞苦は頗る多大なものがあつたことは贅言を要しないが、而かもなほその關係文籍を盡すに於ては遺漏あるは免かれ難い所である。殊に此れら敦煌籍中には首尾完全せるもの少なく、多くは破損缺佚し、零本斷卷に至つては殆んどその何物たるを判じ得ぬものも少からぬ數に上つてゐる。此れ等は僅かにその内容を檢覈し、本典に照合して初めて定め得るものもあるが、三階關係の典籍に至つては一二目錄の存するのみで從來知らるものがなかつたが爲に、その檢出搜索は容易の業ではなかつたのである。これ即ちその遺漏あるを免がれざる一理由である。而

かも縦令へ目録は存しても完全なものでなく、根本典籍とも云ふ可き三階集録對根起行法以外は書名の定まらぬものもあり、ことに題名を缺損するものに至つては果して三階教關係のものなりや否やすら判定し得ざるものが多いのである。これまた遺漏を免がれ得ない理由の一である。茲に掲げんとするものも、當初三階教關係のものとして扱はれなかつたために遺漏に屬するに至つたものの一つで、その題名を缺き、唯法師行狀記の如き形を採るのみで、何人のものなるかさへ詳かにし得なかつたものである。

本書はペリオ氏蒐集にかかる敦煌石室古文書の一として、現に巴里國立圖書館古文書室に收藏されてゐるもので、その題名を迭し、同室の敦煌蒐集古文書目録には法琳別傳に類するものとして目録されてゐるものである。<sup>(三)</sup> 前述した如くその體裁は法琳法師別傳に頗る相似たる形式を採つたために此の誤をなしたものであるが、内容に至つては冒頭より全然異つたものである。目録するに當り、假りに此の書名を附したがために三階教關係文書としての檢索に漏れるに至つたのである。併し此の種關係文書としては頗る興味多きものである。本書は太き巻軸をなし、尺餘の薄き良質の楮紙十二葉を貼合せ、幅二九糎、全長三九五・六糎、略、十三尺に互る長卷をなしてゐる。書體は極めて良筆の細字で盛唐期を下らぬ行體を以てしてゐるが恐らく天寶以後には下らぬものであらう。而して又恐らく支那本地で書寫されたものが、敦煌に送られて世に残つたものらしく、文中世民兩字は必ず缺畫を用ひて

ゐることが著しく認められ、又唐初に使用せられた俗字古體が甚だ多く、中には誤寫脱漏を存し時には顛倒せる箇所さへ屢々見受けられる。長尺且つ細字ではあるが首尾とも筆勢に變る所なく、豊麗な筆致を以てしてゐることは良書と謂うてよいであらう。

本文は全體で三百四十四行、行に三十四五字乃至三十八九字に及び、初行下部を損じ、首部及び中部に四五行の下半部に破損のある外は完備し、最終の行は七字を以て終つてゐる。而して本文の前後には餘白を止めず破却されてゐるので、卷首に題名及び撰者名があつたか否かは明かでない。併し本文冒頭の字句には何等缺くる所がなく、前行に互るが如き字句を有しない。むしろ傳記冒頭の字句として適當なものであるから、これ以外に本文に缺送したものはないことが認められ、末行も七字を以て完結せるものであるから、本文としては首尾具備した完全なものと云ふべきであらう。唯、本文中破損のために諸所に缺字を存し、また判讀し難きものがある外は、本傳記の主たる禪師の名をすら止めない恨がある。文中單に禪師又は闍黎と稱してその名を記さないが爲めに、假りに某禪師と稱し、本文の性質上、暫く「某禪師行狀始末」の名を採つたわけである。

本書が法琳別傳に非ざる事は、已述の如くその冒頭の字句に於て已に異なり、而かも法琳別傳は三卷に分れて略々本書の二倍の分量がある筈である。<sup>(三)</sup> その内容に於て本書には専ら禪師を以て呼ぶに對し、彼には法師を以てするの差違が已にあると共に、法琳の卒年は貞觀十四年秋七月にあり、而して

禪師は咸亨三年六月であるから、更に三十二年の後に當る。その形式は相似たる所はあつても内容に至つては懸絶の差を見るのである。而してその三階教に關係があるものと認められたのは、本文冒頭に於て「無<sub>レ</sub>顯立宗門<sub>一</sub>、牽籠並盡<sub>三</sub>凡中<sub>二</sub>」の語がある外に、先づ本文第三行以下に於て

粗檢三教之文<sub>一</sub>、勘<sub>レ</sub>彼戒行。□法中實謂<sub>レ</sub>當<sub>レ</sub>堪<sub>レ</sub>爲<sub>三</sub>五濁惡時<sub>二</sub>下根顛倒空有二見成就衆生等<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>中大善智識出<sub>□</sub>師<sub>上</sub>也。

の語があることに依つたのである。前者はともかく、後者に至つては、末法惡時の信念に基き、隋初以後の新興佛教として、講說禮儀に終始し持戒修禪に思む舊佛教を捨て、宗教的信仰を基底として救濟の叫を擧げた淨土教に非ざれば三階教によるものであり、ことに空有二見成就の衆生を標榜するものは三階を措きては他になきが爲めに、本書は三階教關係の文書遺文と斷するより外はないのである。更に禪師の行狀を見るに、頭陀乞食して頓捨五欲財色を教へ、十二時行道禮施を行じてゐることは三階教徒の特色を現はし、ことにその弟子が「闍黎既行三階佛法<sub>一</sub>與過去信行禪<sub>□</sub>以不<sub>□</sub>」との間に答へて「同不<sub>レ</sub>別<sub>一</sub>」としてゐることは(本文)、明かに禪師が三階教徒であつたことに疑のない所である。これ即ち本書が三階教關係の「某禪師行狀始末」の名を假るに至つた所以である。

## 二

南北朝末期は支那佛教史上に於て重大な時期を劃する時で、やがて非常な興隆發達を遂げる隋唐佛教を起す重要な轉換期とされ、此の劃期的時期に轉換を興へたものが北周武帝の廢佛破法であつたことは佛教史界の常識とされてゐる。而して此の廢佛の時期は僅か六年にすぎず、北齊の故地には僅々三年を出でぬ短期のものではあつたが、北齊の地にとつてはその滅亡と相俟つて災厄は一層甚しきものがあり、一大法難として北齊佛教界を震撼せしめ、その後に来る北齊故地の佛教に大なる影響を齎らすに至つた。それは末法到來の思想が此の地方に特に顯著に現はれ來つたことである。而してその結果は、同じ北齊の故地から末法思想の信仰を基底として二つの新しき佛教が起つたことは注意すべき事實である。その一は并州に曇鸞を承けた道綽善導によつて淨土教が完成されたこと、他は信行によつて相州鄴都の地に三階教が現はれたことである。而かもこれを歴史的に見れば三階教は淨土教の完成に先だちて起り、隋唐佛教の重要な思想根柢をなした末法觀を、早くも把握して末法佛教を唱導し、一派の獨立を標榜して支那佛教に重大な轉換を興へたものであつた。

末法の思想は佛滅後の時代觀によつて起り、正像二時に次いで來るべきもので、經論已にこれを説き、六朝諸家また末法を説くものはあつても、未だ末法時代を明確に意識したものなく、六朝佛教を稱して又像教の名をすら取つてゐる程である。而して末法到來の思想を明確にし、その初をなすものは南岳慧思の立誓願文であつた。

慧思は本起經の説を起點として己の生時を己に末法の時期至れる後にありとし、その入山及び遭難等の重要記事にも、己の年にかけて末法何年と明記してゐるが、果して單なる學說であつたか或は認惡自省によるものであつたかは明確ではないが、數度に互るその迫害遭難が慧思をしてこの末法の自覺を起さしめたことは認め得るであらう。この立誓願文は周武廢佛に先だつこと二十年、信行立教より三十餘年以前にあり、末法思想はその頃已に兆してゐたことが明かである。

信行以前に末法思想を唱導したと思はるるものに道正がある。道正は河北滄州の人、居に常處なく學は師授に非ず、禪行を習し蘭若を宗とし、冬夏となく深林に栖み、村に乞食して餘は靜坐し、名貫なきも經論の講會には登踐せざることがなかつたと云はれ、後「凡聖六行法」を著はし、開皇七年召されて京師に至り帝に謁して具狀奏聞した。續高僧傳第十六に記す所によると

意以東夏釋種多沈<sub>レ</sub>名教。歸宗窄服流滯忘返。普欲捨<sub>レ</sub>袈裟檢理<sub>一</sub>抱<sub>一</sub>一知宗。守道行禪通濟神爽<sub>上</sub>とあり、僕射高穎の周旋により在京の大徳と會してその説容れられず、「知<sub>二</sub>澆季難<sub>レ</sub>化<sub>一</sub>」として東川に還り、終る所を知らずとある。その六行法は明かに凡聖當機の法を説いたものと見られ、大唐内典錄卷五に、「正頭<sub>レ</sub>隋爲<sub>レ</sub>業、不<sub>レ</sub>隸<sub>二</sub>名貫<sub>一</sub>、悼<sub>二</sub>時俗聲說<sub>一</sub>、故撰<sub>二</sub>茲行門<sub>一</sub>」とし、その行狀は頗る信行に類し、末法惡時の道俗化し難く、時俗濁亂の有様を悼めるは正に末法思想の鼓吹者ではなかつたか。又信行に感化を與へたとされるものに慧瓚と靈裕とがある。續高僧傳第十八によれば、慧瓚は道正と同じ滄

州の人で、戒律を學び、周武の法難に際して陳に遁れ、還りて趙州に攝論の學徒を集めて安居し、大小の經律を講論し、後太原に住し、并晋の地を教化して帝都に進出してゐる。その宗とした所は行科を重んじ戒律を主とし、「身則附<sub>二</sub>依頭<sub>一</sub>、行<sub>二</sub>蘭若法<sub>一</sub>、心則思<sub>二</sub>尋念慧<sub>一</sub>、識<sub>二</sub>妄詮<sub>レ</sub>知<sub>一</sub>」といはれ、専ら頭陀乞食して晋趙の間を行化し、并州の道綽もこれに師事したのであるが、道宣によれば結局律宗の威儀を越えなかつた。然るにその傳に、沙彌信行が従つて受戒せんとして許されず、その弟子に従つて行法を學んだことが記され、沙彌信行は即ち信行禪師であつたと考へられるのであるから、慧瓚の感化も亦否めぬ所である。而し靈裕の感化はむしろ慧瓚に優るとも劣る所はなかつたらしい。即ち靈裕は實に信行が三階教を立てた相州鄴都に住し、常盤博士が嘗て三階教の母胎として紹介された寶山靈泉寺はその經營にかかるもので、その大住聖窟壁間に殘された銘文は頗る三階教説と關係があり、末法佛教がこの地を中心として興起したことは、靈裕の唱導に與る所少しとしないであらう。かくして信行は此の間に出でて末法思想に育まれ、末法惡時を如實に觀察して三階佛法を立て、實踐的宗教として時機相應の當根の法を創むるに至つたものであらう。

## 三

本書に就きて述べるに先だち信行及びその弟子の全貌につきて概略を敘し、弟子中或はその徒衆中

某禪師に相當するものがあるか否かを究めおくことも、あながち無用のことではあるまい。

信行及びその弟子中僧傳中に収録されたものは少くない。又三階の徒として標示されずとも、それらしき者も亦僧傳中に記されたものが一二に止まらないので、それらの中には某禪師にあらざるかを疑はしめるものがあるが爲である。

信行に就いては續高僧傳第十六に、隋京師真寂寺釋信行傳として記載されてゐる外、歷代三寶記・冥報記・六學僧傳中に見え、又趙明誠の金石錄に故大信行禪師塔碑銘文を掲げたる等、普通吾人の見得べき範圍のものである。これらによれば信行には初より定まつた師主なく、何人によりて受戒し又師授を得たかは全く知る所がない。續高僧傳に唯、

及履道弘謙誠悟倫通。博涉經論。情理遐舉。以時勸教。以病驗人。蘊獨見之明。顯高踏之跡。先舊解義翻對不同。未全聲聞。兼揚菩薩。

とあり、歷代三寶記も亦同じく、信行禪師塔碑には

惟禪師苻山岳之靈。膺人天之福。殖善因於往業。託嘉運於今生。(中略)父如來入道。性懷靈。母智慧以歸真。生始冲季志逾成德。慈悲被物解行超群。

とあるばかりで、師授によらずして獨自の明を蘊め、遂に菩薩行を成就せりとなすものである。然るに三寶記にはこれについて「捨二百五十戒。居大僧下沙彌上。門徒悉行。方等結淨。頭陀乞食日止。」

食の語があり、續高僧傳には後に云ふ普佛普行の行をなし、塔影を見れば必ず周行禮拜し、來世敬佛之習となすことを述べた後、「於相州法藏寺捨具足戒、親執勞役、供諸悲敬禮通道俗」とあり、二百五十戒は比丘の具足戒であるから何人かに就いて受戒したとしなければならぬ。慧瓚の傳に、瓚が趙州に歸つた後朔代を経て并州に至り、秦王俊の招請によりて開化寺に住したことを記した後、沙彌信行なる者が慧瓚の弟子に就いて行法を承け、後鄴相に歸りて部衆を立てたとする。即ち沙彌信行重斯正業。從受三十戒。瓚不許之。乃歸瓚之弟子明胤禪師。遵崇行法。晚還鄴相。立部衆。

とあり、已にこの沙彌信行は信行禪師であることが認められてゐるが、何處に於てかかる事があつたか明かでない、太原に於てとせば時期已に遅くして不可能である。或は周武廢佛以前、慧瓚が定州にあつて律席を立てた時にありとするを妥當とすべく、かくすれば「晚還鄴相立部衆」の語は意味をなすものである。

信行の部衆を立て宗門を開創した年代につき、矢吹博士は開皇三年乃至七年とされるが、むしろ開皇の初乃至三年にあつたのではあるまいか。その證は續高僧傳十八の本濟の傳に

開皇元年時年十八。戒定逾淨正業彌隆(中略)會信行禪師創開異部。包括先達啓則後賢。濟聞欽詠欣然北面承部。

とし同十九僧邕傳に

開皇之始弘闡釋門。重敎玄宗。更聯榮聞。有魏州信行禪師。深明佛法。命世異人。以道隱之。晨習當根之業。

とあり、魏州は信行の郷貫で、いづれも開皇の初とし、更に信行遺文には

開皇三年歲次癸□□□□州光嚴寺僧信行。普爲過去未來現在皇帝陛下(中略)諸師父母乃至一切衆生頓捨身命財。屬三十六種常樂我淨等一切法。

とあり、開皇三年には已に父母乃至一切衆生のために、「頓捨身命財」と「常樂我淨法」を屬することとを云ふは、明かに三階立宗を標榜したものに外ならぬであらう。

而してさきには法藏寺に於て具足戒を捨てたといひ、ここには光嚴寺の僧といふ。その間の關係は全く不明であるが、惟ふに相州鄴都の地は已に靈裕の教化普かりし所で、靈裕は専ら華嚴涅槃地論を業とし大集般若等の疏を作つたといひ、又寶山大住聖窟に残る銘文中には、信行の創めた三階佛法の根基をなす末法惡時禮佛普敬の思想、及び七階佛名に相當すべき佛名の刻されてゐる事などより見れば、信行がその遺文の末段に、開皇七年白州知事書中に記された四人の善智識の中、相州光嚴寺僧慧定及び嚴淨寺僧道進は少くともその感化を受けたものと見られ、その導引によりて信行はその信念を固くし、光嚴寺に移りて末法惡時を提唱し、認惡普敬當根普行の三階佛法を立てるに至つたのではあ

るまいか。さればこそ慧定を善智識の一人に數へ、その説く所が華嚴・涅槃・法華・般若・大集等の諸經により、特に北齊那連提耶舍所譯の大集月藏分を依用せる如きは、略その傾向を知るべく、慧瓚の結局律部を出でざりしよりはむしろ靈裕の感化に負ふ處多きを思はしめるが爲である。

信行は開皇九年召によりて長安に出で、僕射高類の外護を得て眞寂寺に住し、三階教はこれより長安を中心として興隆し、多くの弟子徒衆を擁するに至つた。僧邕本濟も亦長安に隨從し、後に信行の塔碑を撰した妻玄證は眞寂寺の僧として信行に師事したものである。僧邕はもと鄴西雲門寺にあつて僧稠に師事したもので、周武廢佛より林中に匿れて道修してゐたのを、信行ききて人をしてこれに「修道立行宜以濟度、獨善其身非所聞也、宜盡弘益之方、照示流俗」と説かしたので、僧邕はこれによつて初て信行の弟子になつたと傳へる。信行のこの語は、その教が當世濟度を目指し、これによつて世俗を弘益せんとする實踐的佛教であつたことが知られる。僧邕は開皇十四年信行の寂後に代つて化度寺の主となり、貞觀五年を以て卒してゐる。本濟は最初に信行より三階集録の口授を受けた人で、大業十一年慈門寺に卒し、弟子に道訓道樹があり、その弟善智もこれに師事して大業三年に卒してゐる。高類は隋の左僕射として隋初功臣の一人で、楊素韓擒虎等その推薦によるものが少なく、道正を招き又信行を召さしめたのも彼で、或は教界の時流を悼み夙に肅正の意があつたのであらう。屢、彼が眞寂寺に遊べることは眞報記に記す所で、信行と談論しその法に服してゐたことが

想像され、開皇十九年事に坐して除名せられた翌年、信行の三階集録は忽ち「勅斷不聽流行」となつてゐる。即ち高類は三階教徒ならずとも、そのよき理解者であつたことは確かである。<sup>(一三)</sup> 信行塔碑文の作者裴玄證は、續高僧傳第十六信行傳の附傳に居士逸民河東裴玄證とあり、已述の如くもと化度寺の僧で、信行が真寂寺即ち後の化度寺に至止するや、これに師事してその述作を助け、後歸俗したものであるが前名を逸してゐる。裴氏は河東聞喜の名族、後漢裴輯の後として代々相將を出すこと多く、聞喜を中心として唐初に一勢力をなしてゐたやうで、裴玄證はおそらく又聞喜裴氏の一族であらう。<sup>(一四)</sup> 續高僧傳に「末從<sub>二</sub>俗服<sub>一</sub>尙絕<sub>二</sub>驕豪<sub>一</sub>、自結<sub>二</sub>徒侶<sub>一</sub>更立<sub>二</sub>科網<sub>一</sub>、返道之賓同所<sub>二</sub>繫贊<sub>一</sub>」とあり、三階教團に陰然たる勢力を有したやうである。

然るに信行塔碑に見ゆる信行弟子中の第一として、僧邕と並び稱せられてゐる法師淨名に就いては全く知る所がなく、宋の陳思撰實刻叢編卷二十にも

唐化度寺淨名法師舍利塔碑 唐裴玄證撰武德三年

として碑目を擧げたのみで、その碑の嘗て存在せしことを知るに過ぎない。<sup>(一五)</sup> 而して玄證の傳に

生自製<sub>レ</sub>碑具陳<sub>二</sub>己德<sub>一</sub>。死方鐫勒樹<sub>二</sub>于塔所<sub>一</sub>。即至相寺北巖之前。三碑峙列是也。

とある三碑とは何であらう。一は信行塔碑で、二は玄證自らのものであるが、三は何を指すか。同じ實刻叢編に、僧法琳撰開皇十四年正月建の「隋信行禪師傳法碑」があることを記してゐるから、或は

此を指すとも云へようが、又玄證撰の淨名塔碑ではなかつたか。武德三年をその撰文の年次であるとせば、淨名玄證の關係に疑を挟まざるを得ない。而して玄證の碑は金石錄三に

第五百七十 唐逸民裴高士碑

正書無書撰人姓名  
貞觀八年正月

とするものに相違ないであらうが、三碑の一が果して淨名のか否かは明かではない。

僧邕の外に、信行の弟子たりしものに化度寺僧慧如がある。冥報記信行傳には僧邕慧如と並び傳へ、次の項に

京城真寂寺沙門慧如。少精勤苦行師<sub>二</sub>事信行<sub>一</sub>。信行亡後奉<sub>二</sub>遵其法<sub>一</sub>。

とあり、「武德之初卒」してゐる慧如慧如が同一人であることは云ふまでもない。更に信行に師事したものに光明寺の慧了がある。金石萃編補遺に見ゆる光明寺故大德僧慧了法師銘によれば、高宗顯慶元年を以て歿してゐる。又金石萃編五十七の道安禪師塔記により、道安が三階の徒であつたことが知られ、同時代に化度寺に無盡藏院を置いたといはれる信義がゐたことが附記されてゐる。道安は

童子出家頭陀共行。學<sub>二</sub>三階集録<sub>一</sub>功業成<sub>レ</sub>名。(中略)以<sub>二</sub>總章元年十月七日<sub>一</sub>遷<sub>二</sub>形超景公寺禪院<sub>一</sub>。

春秋六十一。云々

とあるから、信行直接の弟子ではなく、信義に就ては道安碑の附記に太平廣記を引き、「有<sub>二</sub>沙門信義<sub>一</sub>習<sub>レ</sub>禪以<sub>二</sub>三階<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>業、道安以<sub>二</sub>童子<sub>一</sub>出家、其學<sub>二</sub>三階集録<sub>一</sub>正在<sub>二</sub>武德中<sub>一</sub>、與<sub>二</sub>信義<sub>一</sub>同<sub>二</sub>時代<sub>一</sub>也」とす



るから、同様直接師授を得たものではない。<sup>(二五)</sup> 道安と略、同時代に化度寺の僧海禪師が知られるが、その方墳記により永徽五年六十六歳を以て卒したとあるのみで、事蹟を傳へてゐない。<sup>(二六)</sup>

以上は僧傳碑碣に残る三階教師にして、唐初に知られたものを檢出したものであるが、これ等は皆長安にありて三階五寺を中心として集結せられてゐたもので、五寺には何れも三階禪師が住し、初め化度寺の僧邕がこれを綱領し、其後更に濼廣するも尙五禪師を以て稱したといはれる。<sup>(二七)</sup> 而して本書に傳へる某禪師は正にこの間に在世し、信行發祥の地である相州の地には、その後も信行の感化よく傳はり、唐初帝都長安と並びて三階教團の重要な一中心地であつたといはれてゐるが、恰も此の相州と長安との間に於て、裴氏の一門の據つて勢力をなした河東聞喜の地に近く、所謂某禪師が出でて活躍してゐたことは甚だ興味深きことと謂はねばならぬ。

## 四

三階佛法が隋唐の間に興隆し、信行の門弟が長安を中心として大にその教を布き、三階五寺はもとより、その他にも三階を奉ずる者多く、五禪師がその教徒を統べて濼盛を極めた有様は、僧傳碑銘によりて知ることが出来る。本書に云ふ某禪師は殆んどこれと時を同うしたものであるが、三階教本來の面目を固守し、名を忌み聞を避けて専ら實踐行道によつてゐたがため、その名は中央に知られるに

至らず、他方また長安の盛なるに比すれば遠く及ばなかつたやうであるがため、その如何なる人なるやに就いては全く知ることが得ない恨がある。ことに僧傳碑銘に傳へる信行門下の五禪師及び當時知られたものも、いづれもその卒年を檢する時には本某禪師に比すれば前であり、永徽總章を下るものはないやうである。禪師は咸亨三年五月を以て卒しその行年を明かにしないが、假りに六十五歳を以て遊いたとすれば隋の大業四五年の出生であり、總章元年六十一歳を以て示寂した道安と略、同時代の人となるわけである。隨つて信行直接の弟子でなかつたことは明かですつ信行の弟子との關係も全く知る所がない。

禪師は何處の人であつたか、又如何なる經歷を持つ人であつたかは本文に云ふ所がなく、唯、當世の大善知識たる所以を述べ、その法を興した次第を述べるに過ぎない。即ち禪師自ら云ふ所によれば、七歳にし聖智を覺り慈行徹到し、十三歳にして諸國を巡歴し、遍く道俗に接して一人の出世の行をなすものなきを見、十五歳にして人の性情を究め、人皆墮地獄の必定なることを知り、茲に彼がその行學に就いたことを知り得るのである。而して彼が自行自修して二十歳に至り、諸禪師法師律師論師等師授を得べき人に就いて質し、何れも修道の難きを云ひ、時節を知らずして徒らに講說禮儀を固守し、他を教へて行學を錯り、一人として知法・知義・知時・普解普行・別解別行の己に過ぎるものなきを知つたとするにある。時節とは蓋し末法惡時を指し、これを知るを以て大法師となし、末法已に到れ

る今日、もはや解脱禪定を望み三學を牢固にするの時に非ず、惡時の衆生は唯、五欲財色を頓捨し、福德を行じて名相なく、坐禪を根本となすべしとする事は、正に三階佛法の本義を述べたものである。かくの如く已に師授なく、惡時末法を信仰の基底としてその法を立てたことは、道正信行と甚だ酷似し、後に弟子の間に答へて、禪師の所謂三階佛法と信行のそれとが同一にして別なしとしたことは、正しく禪師が三階教師であることを明かにするものであらう。即ち、本文の百四十行に

有弟子問<sub>三</sub>難禪師。闍黎既行<sub>三</sub>三階佛法。與<sub>三</sub>過去信行禪<sub>師</sub>□□以<sub>不</sub>。禪師云。同不<sub>別</sub>。

とあるのがそれである。更に信行が剃頭して袈裟を披けたるに對し、禪師の殆んど俗服に近きを怪み質したるに對し、凡夫破戒の身にして聖衣を着くるは畏ありとしたことが云はれてゐる。即ち信行の法と禪師の信する所とは全く同一なりと主張し、唯、その形相に於て異なる所は、信行の教ふる生盲佛法の相をその身に現はしたことを意味するものではあるまいか。<sub>二七</sub>更に禪師の死後遺骸を焚き盡して粉末となし、一半を高山頂に於て颺却すべしと遺言し、弟子等これを山谷埴上に捨て、骨肉を有縁に散じた<sub>三〇</sub>とする事は、信行を初めその徒の遺骸を林葬捨身せると全く相同じきものがある。いづれにしても、禪師が三階教の熱心なる教徒であつたことは争はれぬ事實である。

已に前述した如く、禪師が何處で三階を學び又これを修し得たかは知る所がないが、或は長安に於て三階を學んだか否かもとより明かでない。併し地方にも必ずしも三階の徒のなかつたわけではな

く、河東に裴玄證の一族があり、相州には少からぬ三階の徒がゐたと想像され、塚本氏は此所に殘存する二碑銘を挙げ、唐慧靜法師靈塔銘によつて慧靜が三階の徒であつたらしいことを報告されてゐる。<sub>二二〇</sub>もとより地方に於ては長安のそれに比べて盛なりとなし難く、却つてその衆徒三階師の壓迫譏諷が熾烈であつたことは云ふまでもない。塚本氏はまた、蒲州の沙門善謀が初に三階佛法を至極と爲し、後に淨土教に轉じた説話を發表されてゐる。<sub>二二一</sub>これは蒲州に三階師のゐた一例である。併し則天武后の時に、化度寺の無盡藏院を洛陽福先寺に移して天下の物が集らず、復び舊所に還した如き、又禪師の弟子中その三階佛法に疑を挾んだ如き、或は長安より三階を學んだ五衆が來つて禪師に質問した如きは、地方に於て三階師の未だ多くなかつた證據である。

相州に於ける三階の徒として、塚本氏は相州慈潤寺靈琛灰身塔銘と相州寶山光天寺僧順禪師塔銘とを擧げてゐる。前者は寶山に於て、末法佛教を唱導した靈裕の弟子慧休のゐた慈潤寺の僧で、「遇<sub>三</sub>禪師信行<sub>二</sub>更學<sub>三</sub>當根佛法<sub>一</sub>」とし、貞觀二年三月七十五歳で卒し、「康<sub>三</sub>存遺囑<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>經<sub>三</sub>林血肉<sub>二</sub>施<sub>レ</sub>生<sub>一</sub>」<sub>二二二</sub>とあるから、靈琛が信行の直弟子であつたことが知られる。後者には七歳出家の後諸法を求むること四十餘年、「忽遇<sub>三</sub>當根佛法<sub>一</sub>、認惡推善乞食頭陀、道場觀佛精勤盡命」とあり、貞觀十三年八十五歳で卒し、弟子によりて林葬されたことが記されてゐる。即ち靈琛僧順は共に三階師であつたことに間違ひはないであらう。慧靜の塔銘によれば、彼は河東聞喜の裴氏一族で頻に經卷闕文の續寫に従ひ、

一切の像を集めて一堂を建て莊嚴供養したことは、明かに三階教義に當るものである。

又前に述べた相州寶山の靈泉寺は靈裕の住した所で、末法佛教の發祥地とも云ふ可く、その僧彭淵は後還りて終南山に住し、靈裕の卜示によつて寺地を定めたものが至相寺の始であり、大業七年に卒するや、弟子法琳はその散骸の地に舍利塔を立てたこと、及び「身服麤素推<sub>三</sub>景末筵、目不<sub>レ</sub>尋<sub>レ</sub>文口無<sub>三</sub>談義、門人以爲<sub>三</sub>蒙類<sub>一</sub>也」とし、また「奉持瓦鉢、一受至終行住隨身」云々とする如きは、正に三階師であつたことが知られ、信行塔所に近くその寺地を定めた如きは注意すべきであらう。<sub>(二二)</sub>或は彭淵が初より三階の徒であつたかも知れず、然らずとするも靈裕の師授をうけた彭淵が、更に信行の法を聞きてこれに歸することもあり得べきことで、已に慈潤寺の靈琛が信行に歸したと略々同様であらうと思はれる。

河東蒲州の地には聞喜に裴玄證の一族があり、陰然三階教團中に勢力を有し、化度寺の無盡藏院が玄宗によつて破却されるまで續いたのも、裴氏の外護による所が多く、一族中にも三階の徒があつたと想像される。前掲の慧靜はその一人である。而して次の善謀は餘りに年代に隔りがあるが、續高僧傳第二十に見ゆる陷泉寺の沙門僧徹はたしかにその一人であらう。

僧徹は河東萬泉の人、出家の後蘭若を樂行し、索めて州城蒲坂に住み、四俗歸して教化連邑に及んだ。後萬泉の介山下に窟居結業して陷泉寺を營み、徐王元禮が絳州刺史となつて寺またこれに屬し、

請せられて州邑に住したが、後山に還り弘濟成務頗る教化を布いた。併し彼には頭陀乞食六時禮拜の如き記事はないが、特に縣丞であつた唐臨の歸依を得たとして、即ち「度支尙書唐臨、昔住<sub>三</sub>萬泉<sub>一</sub>贊<sub>三</sub>承俗務<sub>一</sub>、性行專信素奉歸依、後仕<sub>三</sub>華省<sub>一</sub>常修<sub>三</sub>供養<sub>一</sub>」とあることが注意される。唐臨は冥報記の撰述者であり、隋の僕射高類を外祖とするものである。已述した如く高類は信行を京師に迎へて外護の誠を盡した人で、恐らく同信の人であり、冥報記には、信行のことを眞寂寺の老僧及び舅氏より聞いたことを注記し、その初頭に信行慧如を傳へた程で、たとへ三階の徒ならずとも、これに深き關係があり理解のあつたことが認められる。僧徹に對しては萬泉の丞たりし時から歸依篤く、貞觀の末入つて吏部侍郎となり、侍御史より高宗の初に御史大夫に進み、尋で兵・刑・度支・吏の各部尙書に歴任した人で、華省に仕したとは此をさすもので、顯慶四年事に坐して貶謫されるまで供養を怠らなかつたものである。唐書卷百十三の本傳によれば

臨儉薄寡欲。不<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>治<sub>三</sub>第宅<sub>一</sub>。性勞通專務。掩<sub>三</sub>人過<sub>一</sub>。

とあり、舊唐書の傳にも「服甲簡素、寬<sub>三</sub>於待<sub>レ</sub>物<sub>一</sub>」ともあり、その性行は頗る三階教徒に類するものがある。この唐臨が歸依奉事した僧徹も、亦明かに同信同行の人ではなかつたか。この推測が許されるならば、唐臨僧徹共に三階の徒であつたらしい。僧徹の卒年は明かでないが、唐臨度支尙書であつた時とすれば顯慶二三年頃にある。<sub>(二四)</sub>又冥報記には、僧徹の傳について河東沙門道英の事を傳へてゐる。

その中に「或時爲人牧牛、食菘噉飯、或著俗衣髮長數寸」とあり、某禪師に甚だ酷似するが、その卒年が貞觀中に在つたから、もとより別人であることは明かである。

## 五

禪師は已に云ふ如く何處の人であるか明かでないが、おそらく河東郡蒲州及び絳州の地以外ではなかつたであらう。それは本文中に現はれた禪師の行跡が、大體この地方に限られてゐるからである。禪師はその居所常なく、轉々としてその住地を變へてゐたやうであるが、本文中に最初に見られる居處は悲田寺である。悲田寺の位置は河東蒲州にあつたやうで、それは後に

禪師在蒲州。爲悲田寺造禪院時。於蒲州城西盟津河頭買木。(本文中の三〇〇行)

とあるからである。蒲州の治城は蒲坂で、即ち河東縣城を指すものであり、今の山西永濟縣に當る。禪師は荒廢の寺院を修造し、堂舎を造營するをその勤としたやうで、これは三階教に於て無盡藏功德行の一に數へられてゐるがためである。(二五) 悲田寺の修造は、禪師が功德行の一つとして最初に行つたものらしく、房廊堂舎の外に禪院一處一切舎屋を構築してゐるが、恐らく禪師が暫く此處に止つたであらうことは、「越一年並悉成就、其錢自生、禪師說、在禪院所不敢說法、自身唯爲衆生行道」(本文二) とあることである。而して禪師はこゝに在りて、行道中に諸境界を觀察し、比丘が衆生と共に

地獄に墮ちんとするを觀じ、悲泣して堂を廻る薦藁悉く濕潤したといひ、特に禪師が此の禪院壁間に地獄變相圖を畫かんとして涙のために得なかつたことが注意される。禪師は更に山に入りて修道の所を求め、涸泉を更生して屋舎を造り、此處に初て數十餘の同行者を得たとしてゐる。その中に禪師穿鑿山巖作一圓窟。遂鑿不過一二尺。忽得一大孔無底。禪師呵々大嘆云。我法出現不レ過旬日。遂得數十餘人。教頓捨五欲。入三乘法堂。十二時行道、不關三年。相續作業。

(本文二〇行  
乃至二三行)

とあり、禪師の三階佛法を始めた最初のものとききであらう。而して禪師の山の中に入つたのは、或は悲田寺僧中禪師の行道を忌み、これを壓迫したためであらう。それは本文に

禪師說。在悲田寺禪院所欲建立正法。爲凡夫羅刹僧多。恐畏失命。不敢通法。何以故。

羅刹僧諱惡故。捨寺入山寂靜之所。其處號曰百梯。(本文五三行  
乃至五五行)

とあることによつて明かである。この百梯とは蒲州の東山を指すもので、雷首山を始め歷山首陽山薄山襄山等八名を有するとせられる中條山の西端に當り、山西通志によれば「雷首之東爲薄山、亦曰襄山、中條之脊也、東與虞鄉界」とし、又「薄山之東爲方山、一名鹽道山、亦曰檀道、又名百梯山、在虞鄉西南七里、其東曰五老峰」とあるものがそれである。(三六) 後に禪師が止住した百梯下寺といふのは、實に百梯山下にあつたものであらう。而して禪師は蒲州城を去つて歷山より方山に入り、

山中靜寂の處にその居を移したもので、それが即ち百梯山であつたことが知られる。この事はまた禪師自ら明示してゐる所である。即ち禪師が絳州翼城縣ではるばる五臺山に文殊を禮せんがために赴く吐火羅國婆羅門胡僧佛施及び達摩に會し、これに自らその所住を告げて

下人所今在三蒲州東五父百梯山。(本文四三行)

としてゐることである。即ち禪師はその後蒲州城東の山中に入つて百梯山に留つてゐたことが明かである。ここに云ふ五父とは蓋し五老山とも稱する五老峰を指すもので、五老仙人飛來の地として知られる所である。本書の筆者がこれに「五父者五臺也」と解釋し、五臺山の文殊は即ち五父百梯の禪師であつたことを暗示したものに過ぎない。

百梯山中禪師の所住は只靜寂の處とのみ記されてゐるが、百梯山下には百梯寺又は百梯下寺がある。續高僧傳には栢梯寺とあり、金石萃編五十七及び山右石刻叢編卷五の劉君幡竿銘中に「敬樹幡竿於栢梯山寺之西南岑也」の語があり、栢梯山寺とする。この銘は開元三年の所建にかかり、蒲州虞郷令劉君幡竿銘と題し、縣令劉行忠が百梯寺に幡竿を樹てしことを銘したもので、上坐崇簡寺主彥琮の名を署してゐる。虞郷縣志には百梯寺を百梯村の上に在つたとし、山西通志の引く舊通志には虞郷縣石佛寺在縣西南三里即古百梯寺としてゐる。三里は正に十三里の誤であらう。而して百梯寺栢梯寺又は栢梯寺は皆その普通のために變じたものであらうが、山右石刻叢編に、「或曰、舊山多栢、故變百言

栢、即碑所言之栢梯山寺」とあり、少くとも唐の中期以後百梯はまた栢梯とされたやうである。本文中の百梯寺又は百梯下寺はこれを指すものである。而して栢梯寺は又蒲州の名刹とされたことが續高僧傳第二十曇猷の傳に見え、虞郷縣谷口の靜林寺、州治城蒲坂の仁壽寺及び淨土寺と共に、昌律師及び弟子曇猷の教化によつて貞觀中に築えたことが傳へられてゐる。而して本文中、禪師は又百梯下寺にも禪院一處を造り、更に虞郷縣崇靜寺にも亦一處を建ててゐることが見える。この崇靜寺は、さきの婆羅門胡僧が禪師を訪ね蒲州に來つて禪師に會つた所で、崇靜寺講攝論大德智達法師及び安邑縣の攝論尼阿相師は、その徒等と共に三階教徒であつた。即ち

達師相師等數十人皆捨名聞徒衆。四事頓捨三業隨逐。

とあることによつて知られるのである。

又禪師は虞郷縣の東方安邑縣善根寺に說法して獎禪師を得、爲に禪院を作つてゐる。また禪師は絳州に在つて說法をしてゐるが、この絳州は、後に絳州に至るの日、絳州城内外四遠の道俗老少萬餘人皆香花を持して黃檗に禪師を迎へたことを記すものと同じく、汾水右岸の今の新絳を指すもので、さきに翼城縣に往つた時も亦絳州に往つたのであるかも知れぬ。

かくして禪師の遊行巡歴の迹を見るに、略、蒲州絳州を出でぬ範圍にあり、主として虞郷縣南方の百梯山は禪師常居の地として間違ひはないやうである。咸亨三年六月十五日禪師が遷逝の地も亦恐ら

く此の地にあつたのであらう。而してその神靈は蒲州東山闍提寺耶田谷に送られ、大平埴下小平埴上に穿窟して身肉血を捨て、これを有縁に散じたとしてゐるが、蓋し遺囑によるもので、三階教徒常習の林葬に従つたものに相違ない。而して闍提寺は又蒲州東山とする以上、禪師が初に入つた山と同じであり、方山百梯山の内にあつたものと考へられ、耶田谷は明かでないが、闍提よりする轉音ではなかつたかと思はれる。<sup>(三七)</sup>

## 六

前述した如く、禪師は已にその初に於て悲田寺を逐はれ、百梯山中に栖みてその禪行道を續けたのであるが、禪師に對する迫害は決して此れを以て終るものではなかつた。本文の到る所にその片鱗を窺はれるものが多く、その終焉に際しても殘害譏謗が逼つてゐたことを物語つてゐる。隨つてまたその交友も少かつたやうで、本行狀記に記す所でも僅かに五指を屈するに過ぎない。矢吹博士が已に信行の師友少きを指摘して、續高僧傳の著者道宣の云ふ如く「奉行剋峭偏薄不倫」によるためであつたか、或は歴代三寶記に云ふ如く「愛同惡異」がためであつたかの何れにもせよ、三階教根本義によつて來れるものであるとしてゐることは勿論であるが、禪師在世の頃には三階教の再び興隆した時であるに拘はらず、地方的迫害が相當はげしかつたが爲であることを思はしめる。同時に又禪師の

場合に於ては、その教旨の根本義を以てすれば、かかることはむしろ當然のことであつた。

禪師は一切外典を讀まず、世俗の筆に捉はれざらんが爲であると標榜してゐることは、「偏薄不倫」の誹を甘受しなければならぬのであるが、禪師がその教のために迫害を蒙つたのは悲田寺に於て立教を志したことに始まるやうである。已に悲田寺の禪院に住し、縱令へ説法を敢てしなかつたとは云へ、行道禮施し、行道中に諸相を觀じて諸比丘の將に地獄に墮ちんとすとなす如きは、その寺僧の怪む所となり、忌憚されるに至つたことは云ふまでもない所で、地獄變相圖を畫き得なかつたことも、蓋しこれらによるものではあるまいか。その結果所謂凡夫羅刹僧に迫害され、悲田寺を逐はれるの已むなきに至つたものであらう。禪師が僧家のために田を作る時、人の僧地を侵して水用を塞がんとしたるを見て、檀越僧地を侵す勿れと誡め、却つてその人々より殺害せられんとせし時に

我故來救衆生。今既未救。即被打殺衆生墜落。我來空無所獲。須作少多氣力降伏彼人。<sup>(抄文三)</sup>

としてゐることは、その信念に篤きを物語るものである。かかる迫害譏謗は禪師の身邊に次ぎ次ぎに降りかかつてゐたやうで、その終焉に近き頃にもなほこれを物語つてゐることは、如何にそれが激しかつたかが窺はれる。即ち

禪師嘗。今有八州邪見道俗欲害於我。斂儀以得千餘貫。欲與濁□□奏於我。未與之間。

詔曲レ鑿師レ實等數百餘僧。斯既事發。是以不レ得レ奏。我今不レ得レ久住。今欲レ更レ住レ還被レ他害。於法無力。是以不レ得レ久住。我須レ速脫レ現在。(本文一四八行)とあり、更に又

禪師語レ弟子等。我合レ八月レ去。今被レ催促レ不レ得レ住。我今久住於レ法無力。結氣滿破レ心。吐血而去。經律論說レ末法惡時。一人起レ大悲レ救レ拔衆生地獄之苦。乃被レ羅刹神鬼所レ怖。禪師忙怖。辟レ心吐レ血而死。(本文二七九行)

ともあり、前者は明かに具體的事實によるもので、後者は无形的のもので信念によるもののやうであるが、實は此の時禪師は西京一邪善持戒僧曇行のために甚しき迫害を被つてゐたのである。かくして禪師は傷心吐血して卒するに至つた。その譏謗に至つては本文中隨所にこれを見られるのである。禪師は經説を引き、その羅刹神鬼魔邪惡邪見の道俗破戒の比丘が常に持戒依法者を殘害することを説き、認惡修禪を教へてゐたが、禪師も亦これがためにその命を墮すに至つたわけである。

本文中また特に「不開口」を強調し、唯食を取るの外は一切の開口を戒め、その付法行學の弟子に對しては禁口不言死人の如くならしめ、「乃至被打被殺千死萬死億死不レ得レ分疎レ、(中略)乃至命終必如レ野獸死、始可レ得レ免レ泥犁レ」とし、譬喩を説きて、濫に法を説き開口して人を誤り、錯知錯行錯學に陥らしむるの罪を誡め、絶對不開口を以て墮地獄を免がれ得べしとしたのである。これは三階教の

本義によるものではあるが、又迫害を避けんがためでもあつたであらう。

禪師は閻黎を以て呼ばれ、また禪師と稱せられたに拘はらず、その風態は頗る異様のものがあつたらしい。勿論その初に於ては比丘沙門の行儀に従ひ、剃頭袈裟を披けてゐたやうで、悲田寺を修造し禪院を造つた時には、他と異なる所なく僧形であつた。それは禪院を建てるために、蒲州城西の盟津河頭に木を買ふに當り、錢を左右の膊上に着け、袈裟のために覆はれて人目に觸れなかつたとすることである。然るに絳州翼城縣で婆羅門胡僧に會つた際には、一清信士として居士態をなしてゐたことで、「簡異レ常宜、自着レ故破布衣レ負レ一箬瓢レ」へる異様の風態をしてゐたのである。更に後に至つては「着レ羊裝レ把レ單瓢レ」の有様である。後者につきて人の何の意なるかを問うた時に、佛法なほこの風ありとして三種の大益を數へてゐるが、清信士として現はされてゐる所から見れば、袈裟を着けなかつたことはもとより、又留髮でもあつたらしい。それは弟子中禪師の三階佛法と過去信行のそれと同じや否やを問へる後に、信行は剃頭して袈裟を披けたと云ふに對し、禪師は邪見の道俗袈裟を披けて我に害を爲す、凡夫聖人の衣服を着けて破戒無數なりと誡め、又佛は剃頭を説かざることを説いてゐることを以て推して知られるであらう。而して故破布衣を着、羊裝をしてゐたのは、頓捨身命財の三階教の本義に基き、一切好衣を捨て一切惡衣を着るべしとなすことによつたことは、本文後段に一切捨盡の教を説いてゐることを以て知ることが出来る。即ち禪師の異裝は蓋しまた三階佛法の根本義

によつたものとすべきで、禪師の師友殆んどなきもまた一切捨盡の法によるものであらう。

## 七

以上本書につき、禪師の如何なる人なりしかを究めんとして遂に検出し得ず、爲に當時の三階師につき一々検討を試みたるも、亦遂に何等の繋聯を把み得なかつたことは甚だ遺憾であるが、結局禪師は無名の三階師として残さるべきものであらう。唯、茲に本書につきて一の臆測をなすとすれば、敦煌古文書中の「龍錄内無名經論律」なる一斷片中に、「略述禪師本末一卷」なる目を見出す。<sup>(三六)</sup>此の禪師が何人であるか、信行を單に禪師としたかも知れぬが、恐らく卷中禪師の名を標するものがなかつたために、かく目録したものであるまいか。若し内容にして信行禪師に當るものであれば、必ずや三階目録として信行の名を標出すべきである。然るに單に禪師とのみ稱することは、全く内容として禪師の如何なるものなりやを明かにし得なかつたがために外ならぬ。果して然りとせば、「禪師本末」なる題名は頗る本書卷の内容に相當するものではなかつたか。茲に於て余は本書卷を以て「略述禪師本末」なるものと斷じ度いのであるが、未だこれを肯定すべき何物も存しないが爲、假りに「三階某禪師行狀始末」の名を以て命ずることとしたわけである。果してこの行狀始末と「禪師本末」とが同一のものであるか否かは他日の研究に俟たねばならぬであらう。或は永久不明とせねばならぬかも知

れぬが、唯、自分としては此の兩者が同一物であるべきことを信じたい氣持を有することをここに附言しておく次第である。

今一つ考ふべき事は、本文最終行に見える「當根破病藥第一卷」なる語である。前掲の「龍錄内無名經論律」中これに相當するものなく、同じベリオ氏敦煌蒐集古文書中にある「人集錄都目一卷」中に

## 根機普藥法兩卷九十一紙

なる一目を見出す。<sup>(三九)</sup>この兩名を比較するに、名は多少異なるも内容は同一物らしく、「當根破病藥第一卷」は何卷のものか明かにすることは難いが、二卷以上のものであつたことは云ふまでもない。貞元新定釋教目錄中にも「根機普藥法二卷」<sup>(四〇)</sup>を載せ、都口中のものと全く同一であることが知られる。仍て惟ふに、本書卷に載せた「當根破病藥」は、或はまた「根機普藥法」と稱したものの異稱ではなかつたか。三階教籍中にはその題名の一ならざるものがあり、「人集錄」は「三階集錄」とも稱し、亦「三階佛法」なる題名をさへ稱へてゐたことがある程で、對根當根は能所の別こそあれ、殆んど同様に使用されてゐる。結局根機普藥法は當根破病藥〔法〕を意味するものであるが故に、此の兩者も亦同一のものと見る外はないのではあるまいか。但しその全貌を知ることが得ないが、本文の末段に「在當根破病藥第一卷具說盡」の語あるのは、その一分が本文中に現はれてゐることを意味し、その片鱗を窺ひ得るものと信するのである。若し本行狀始末が「略述禪師本末」であるとせば、已に湮滅し



た三階教關係典籍中の二部が明かとなるわけである。

尙ほ本書卷の内容につきては考説すべきものが多々存するのであるが、今は禪師が地獄變相圖を畫かんとしたこと、禪師の説く所が頗る戒律的な點の多きを認め、信行の三階教の内容に比してやや差違の生じて來たものでないかの疑を有つものであることを附言して一先づ擱筆することとする。

(昭和一二、九、二八)

- 註(一) 塚本善隆氏「三階教資料雜誌」支那佛教史學一ノ一。「三階教雜記」同上二ノ二。大屋徳城氏「三階佛法」大正十四年刊。
- (二) 目錄には、表に陰陽家墓入地深淺法五姓田冊五家第卅七とあり、「裏面に興味ある某禪師の傳記を記す文書、法琳別傳にあらざるか」云々の解説を附す。即ち Collection de Pelliot, Manuscripts de Touen-houang. N. 2550 の整理番號を附するものである。國學季刊第一卷七四一參照。因に同日録に表とするは實は紙背で、法琳別傳かといはれる本文の書寫された方が表をなすものである。目錄解説に此の種の錯誤は屢々出會する所である。
- (三) 「唐護法沙門法琳別傳」三卷、縮藏致ノ八、大正藏經五十二卷。
- (四) 矢吹博士著「三階教之研究」二〇—二〇五頁、結城學士「支那佛教に於ける末法思想の興起」東方學報東京第六冊二〇五頁。

(五) 「立誓願文」大正藏經四十六卷七八七頁。結城學士同上二〇七頁。願文は慧思が四十五歳の作とされ、陳の太建九年六十四歳を以て示寂した時より逆算すれば北周の明帝元年、陳の武帝二年に當るから示寂前十九年になる。北周が廢佛を行つたのは示寂前三年、北齊を滅して廢佛を行つたのは示寂の翌太建十年で、その年武帝死して翌年に廢佛は緩和されてゐる。

(六) 續高僧傳第九、縮藏致ノ三、大正藏經五十卷。常盤博士「支那佛教史蹟評釋」第三、同「三階教の母胎としての寶山寺」

宗教研究新第四ノ一、塚本學士「三階教資料雜誌」支那佛教史學一ノ一。

(七) 歷代三寶記第十二、縮藏致ノ六、大正藏經四十九卷。冥報記、續藏乙二三、大正藏經五十一卷、六學僧傳、續藏乙六。なほ信行に關する碑銘に就いては、矢吹博士「三階教之研究」七—九頁、塚本學士「三階教資料雜誌」支那佛教史學一ノ二及び二に詳細記されてゐるが、神田喜一郎學士の三階關係古碑の考證は碑の由來を知るに重要なものである。神田學士「三階教に關する隋唐の古碑」佛教研究三ノ三。

(八) 秦王俊は文帝の第三子、隋書本紀によれば并州總管となつたのは開皇十年頃で、初め頗る令名あり、後奢侈を以て開皇十七年官を罷められるまで前後八年に互つてゐる。信行は已に開宗して長安に進出した時代であるから、太原に訪ねて受戒を請ふは不適當である。

(九) 矢吹博士「三階教之研究」一七頁。開皇七年の白州知事書により、この時三階教の組織體系圓熟を遂げ、公然普法普佛の宣傳に入つた年次とするがためである。而してこの書に於て、信行はその教旨を継述して奏聞を請ひ、聽許を得んとしたもので、後長安に進出したのはこれが機縁となつたのであらう。同上別篇信行遺文參照。

(一〇) 常盤博士「三階教の母胎としての寶山寺」宗教研究新第四。「支那佛教史蹟評釋」第三。

(一一) 續高僧傳第十八及び第十九。

(一二) 隋書卷四十一、列傳第六高僧傳、冥報記上參照。續高僧傳第十六信行傳に「僕射高僧遠延住立真寂寺立院處之」といひ、冥報記には真寂寺に就いて「此寺臨外祖齊公所立、常所遊觀、每聞舅氏說」とあり、齊公とは齊國公高僧をさす。矢吹博士「三階教之研究」四六乃至四八頁參照。

(一三) 顧炎武「天下郡國利病書」卷四十六山西二に「聞喜之裴自後漢裴輯而下、華北倉村數里間凡五十二人、皆尚書侍郎國公將相、亦宇內之罕有也」とあり、唐書卷七十一上宰相世系表上に裴氏五房を記し、裴氏唐代宰相たるもの十七人を擧ぐ。高宗時の裴行儉も聞喜公と稱して聞喜の人であつた。かくて一族唐代に榮えて河東の聞喜安邑解縣の間にあつたやうである。矢

三階某禪師行狀始末に就いて

吹博士「三階教の研究」四四頁、塚本學士「三階教資料雜記」支那佛教史學一ノ一、九九頁參照。

(一四) 寶刻叢編の信行淨名及び裴支證の三碑につきては塚本學士が「續三階教資料雜記」支那佛教史學一ノ二(九六頁)に報告されたことによりて知つたのである。金石録には單に「唐逸民裴高士碑」とあるが、これには「唐逸民正議大夫裴支證碑」とあり、塚本氏は金石録のものに案高士裴支證也の註記の添へられてゐることを記されてゐるが、四部叢刊本の金石録にはこの註記を缺いてゐる。

(一五) 信義については太平廣記卷四百八十三雜錄一にあり、矢吹博士「三階教之研究」四八乃至四九頁參照。

(一六) 毛鳳枝「關中金石文字存逸考卷三、神田學士「三階教に關する隋唐の古碑」上、佛教研究三ノ三、三六六。矢吹博士「三階教之研究」五四頁。尚龍谷大學の禿氏君の將來せる拓本には永徽五年十一月八日とあり、毛鳳枝の記載を是正するものである。三階教師であることは方墳記に「以顯慶二年四月八日於信行禪師所起方墳焉」とあるに依る。

(一七) 冥報記卷上、信行傳參照。矢吹博士「三階教之研究」寺誌一三三頁。

(一八) 塚本學士「三階教資料雜記」支那佛教史學一ノ一、二六頁。

(一九) 信行は戒を捨てて沙門の姿を捨てず、裴支證は僧を捨てて俗に歸し、共にその法を遵奉した。三階の徒で居士たるもの多きは、末法惡時の生盲佛法として、その身に邪惡破戒の惡行を認めるが爲であり、禪師も後に袈裟淨衣を捨て、その教に歸した沙門に返り戒還俗とするものが多いのを記すのも亦此がためであらう。

(二〇) 信行が終南山棟椽谷鳴埭に遺骸を捨て林薈の法によつたのは、遺文にいふ「願施无盡」に従ふものと无始以來の宿債を負へる身を普く生類に施さんとするもので、この意味は又本書にも明示されてゐる。僧黨初め信行の弟子教徒等皆これに従ひ、遺骸を信行塔のある終南山鳴埭に棄てて等しく无盡藏法の同行功德に與らんことを願つたのもこれ同一の意味からである。

(二一) 塚本學士同前、六一乃至七四頁及び「續三階教資料雜記」同前一ノ二。

(二二) 塚本學士「續三階教資料雜記」支那佛教史學一ノ二、一〇六頁。名古屋眞福寺藏建長六年乘忍書寫の「住生淨土傳 桑門戒珠集」中に在り、善誦は元和末年に五十二で卒した人である。同書は未刊本で、宋戒珠「淨土往生傳」とは別本であると云ふ。

(二三) 續高僧傳第十一、縮藏致ノ三、大正藏經五十卷。靈裕と三階教及び信行との關係に就いては常經博士「三階教の母胎としての寶山寺」宗教研究新第四、五〇頁參照。

(二四) 唐書卷百十三列傳三十八、舊唐書卷八十五列傳三十五。唐臨は高宗即位して大理卿となり永徽元年御史大夫となる。度支部はもと戸部と云ひ、顯慶元年度支部に改む。なほ徐王元禮が絳州刺史となつたのは貞觀十七年である。唐書卷七十九列傳第四、舊唐書卷六十四列傳第十四。

(二五) 矢吹博士「三階教之研究」四八、信義の化度寺に置いたといふ无盡藏院につき、太平廣記卷四百九十三雜錄一に「貞觀之後、捨施錢帛金玉。積集不レ可三勝計。當使此僧監當分爲三分。一分供養天下伽藍增修之備。一分以施天下饑饉悲田之苦。一分以充供養無碍。士女禮懺聞咽捨施。爭レ次不得更有述。車載錢積捨而棄去。」とあり、常樂我淨行の無盡藏施を現はしたもので、これ等普施によつて罪の宿債を償はんとするもの、三階教は特に檀度施行を理想とし、信行は頓捨身命財を設き禪師は頓捨五欲財色を教へ、教義にも實踐にも施與を主な行とした。伽藍の修築建立も寫經補寫も亦これによるものである。三階佛法卷二に、三階教の特色を述べたその末段に、破寺破像破經の修築修繕の功果は新像新經新寺の建立のそれに勝る功德あることを記してゐる。

(二六) 山西通志卷三十一山川考一、太平寰宇記によれば「檀道山在城西南一十三里、一名百梯山」とし、元和志には「檀道山一名百梯山、在處鄉縣西南一十二里、山高萬仞、躋攀者百梯方可升降、故曰百梯山」とするのがこれで、寰宇記の城とは處鄉縣城を指す。引く所の舊通志には水經注を引き、「方嶺雲回、厥頂方平、此方山所由也」とあり、又山頂壇の如きが故に檀道の名ありともなす。

(二七) 闍提は慧琳音第二十七卷(縮藏爲ノ八、大正藏經五十四卷)に金錢花と釋し、「an.の音譯とする。「枳橋易土集」に法華義疏を引き、此云生亦云實とし、闍帝の釋に「闍帝花此云葶藶或云系冠花、字書葶藶藥名草實恐闍提花乎」とある。百梯山は山西通志によれば、頂上方平にして良藥有りとし、古來藥草の產を以て知られた所であるから、仍て闍提寺は藥草花香を以て名付けた名であるかも知れない。

(二八) 矢吹博士「三階教之研究」別篇二二六頁、同じく巴里國立圖書館收蔵のベリオ氏敦煌蒐集古文書中に在り、一枚の四分ノ一許の黃紙に記すものである。矢吹博士も云はれる如く、入集錄都目及び開元・貞元兩釋教目錄に見えざるものを列擧してあるが、これらが一々敦煌石窟寺に收蔵されてゐたものとは限らぬまでも、必ずや開蔵によりて目錄したものであらうから、石窟發見の書は此の中に存すべきもので、即ち此の書目中の書は敦煌石窟より取り出された筈である。故に「略述禪師本末」を以て本書の假名「三階某禪師行狀始末」に當てんとするものである。

(二九) 矢吹博士同上、別編二二三頁、及び本編一六三頁。此の兩者の比較は甚だ困難であるが、矢吹博士の解説によれば「本書の内容は對根起行よりすれば第三階機は普法の普藥に非ずんば能く其の邪三毒を治癒し得ざるを論ぜしもの」とするから、結局當根破病藥(法)は同一意味のものである筈である。仍て兩者が同一物であらうことを認めんとするのである。

(三〇) 矢吹博士同前、別篇二二七頁、龍谷大學藏貞元新定釋教目錄卷三十。これは永久三年三月七日書寫本で、縮藏及び大正藏經本に缺けたるものである。

### 三階某禪師行狀始末

- 1 無顯立宗門窄籠並盡凡中。或有東蕃士子披攬九經。西域文家遠包七略。或□□  
進士能繼習三教之言。尤能士英才演說十二五千之典。競相起請探探微微言妙旨。悟仰之彌  
遠。心皆有愧。數又難覓。勺海以蜚。無能知其本末者矣。粗檢三教之文。勘彼戒行。□  
法中實謂然當堪爲五濁惡時下根。顛倒空有二見。成就衆生等。爲大善知識。出□□  
5 師也。所以然者。如禪師自云。年始七歲。則有自覺聖悲智。愍衆生。慈行徹到。  
禪師說。年一十有三。巡歷國土城邑。遍求覓道俗。自看自驗。處々遍觀。無有一人能  
教化衆生。作出世行也。△禪師說。我年一十有五。入向衆生心中。人々不覺。則知衆生  
墮於地獄。△禪師說。年廿見諸禪師。法師律師論師等。皆云。脩道思。不知其時節。  
教他人。並悉錯行。錯學。無有一人。知法知義。知時。普解普行。別解別行。能過已者。  
10 △禪師說。知時故名大法師。當今不是行。解脫禪定。多聞牢固。三學之時。何以故。時節  
已過。故唯須頡捨五欲財色。行福德牢固。無名無相。坐禪爲根本。△禪師說。曾出家

已來常乞食、不應供不食、僧食自省緣、爲僧家官事、喫一頓僧食、陪米一百卅石。

△禪師說、會生已來教衆生及自己身、不讚詠外書、不捉世俗之筆、△禪師說、爲悲田寺造房廊堂舍、無有一人助作、唯獨一身、更造禪院一所、一切舍屋、計用人功數千餘貫、不越一年並悉成就、其錢自生。禪師說、在禪院、不敢說法、自身唯爲衆生行道、當

行道之時、見諸境界、在境界之中、見諸比丘、將諸衆生、似如微塵、墮於地獄。禪師雨淚、其淚、遶堂薦席、並皆濕徹、其禪院之、取欲畫地獄之變、爲障、不得作。禪師行至山中、即遺脩、有爲處、所、其山、先有泉水、其泉、欲涸。禪師自到、造人、然香、禮拜、自然、更生、泉水、方廣七尺、泉水、自出、多人、取用、其水、不減、少人、取用、其水、不增、禪師、所爲、屋舍、意欲、者、須

20 巧匠者、禪師穿鑿山巖、作一圓窟、遂鑿、不過一二尺、忽得一大孔、無底、禪師呵、大嘆云、我法出現、不過旬日、遂得數十餘、教頌、捨五欲、入三乘法堂、十二時行道、不闕三年、

相續作業、其行道方法、出衆制上、略舉大綱、過乃塵沙、於其中間、遂感得、蟻子、可闕三寸、

已來、周匝三階、遶堂、與人一、種、十二時行道、不闕、始知、禪師非凡、亦有、騎香山、驢等獸、行道不闕、禪師說明、知應身、類皆入行者等、唯可深敬、不得輕慢、現在、作行業人、聞此、已悉、皆啼泣、

25 禪師會爲僧家、作田、大、有人、役、損衆、僧地、拘次、水用、禪師語、彼人云、檀越、莫復、僧地、水用、大得罪、其五六十人、受禪師語、皆將一棒、衣內、着、即發惡心、欲、禪師、師、即知、欲、煞、思量、我、故來、救衆生、今、既未、救、即被打、煞、衆生、墜落、我來、空、無所獲、須作、少多、氣力、降伏、彼、

人禪師邊相有一黃特牛、其形極大、禪師一手捉牛尾、掉旋經於數匝、其牛倒地、悶絕而死。

五六十人等一時捨棒、啼號悲泣、和南慙愧云、弟子等愚夫、生育、不識、閻黎、始知禪

30 師非凡力、西吐火羅國有二婆羅門胡僧、一名仏陀、一名達摩、等云、西國有一居士、於

三乘戒行、最爲第一、語、仏陀、達摩、等云、東漢國有一大、比丘、通其、頌教、大乘、仏法師等、速往彼國、故應得見、仏陀等、尋此語、以經歷、數十餘國、更逢一小乘羅漢僧、名曰、盧地迦、來往此國、仏陀、達摩、等、禮拜、盧地迦、訖、仏陀等、問小乘僧云、師向東國、有何、所、須、羅漢

僧云、我向東國、五臺山中、覓文殊、師利、等、仏陀等、共遊到此國、入京城、仏陀等、諸寺、訪求

35 一乘仏法、並無、有別解、別行、求名、求利者、處、充滿、無有一人、解行、能過、已者、小乘、盧地迦、到此國、已亦求名相、与漢官、記識、乃云、我是、長年、婆羅門、來過、已者、小乘、盧地迦、到

此國、已亦求名相、与漢、至此國、五臺山中、禮文殊、等、漢官、聞此語、已乘傳馬、与長年、共往、五臺山、長年、共漢官、出關、盧地迦、語、仏陀等云、与師行路、取別、師等在後、我先往、彼漢官、乘傳馬、婆羅門、僧、跣足、步行、一日、七百餘里、与馬走相及、於先而去、仏陀、達摩、等在後行、

40 至絳州翼城縣、乃逢一清信士、簡異常、宜、身、着、故、破、布、衣、負一、篋、飄、不、共、人、語、唯、高、聲、唱、此、過、去、之、語、言、我、深、敬、汝、等、不、敢、輕、慢、汝、等、皆、行、道、當、得、作、仏、唱、此、過、去、之、語、

禮拜四衆、仏陀、達摩、二人、覓、視、形、相、不、覺、雨、淚、窮、研、共、語、更、不、開、口、仏陀、達摩、等、殷、勤、苦、逼、唯、更、不、語、以、手、畫、字、語、仏陀等云、下人、所、今在蒲州東、五父、百梯山、畫此字、更則、不作、仏

- 44 隨達摩看此字訖。遂即却住蒲州。尋訪行至蒲州虞鄉縣崇淨寺禪院之。乃遇禪師。達摩和南已訖。禪師慰問。公隨達摩等。師從何所來。公隨等具陳本意。欲往五臺山。中覓文殊師利。禪師云。見文殊師利。及見釋迦。得識以不。達摩師云。識禪師云。何者是也。達摩聞此語已。即抱禪師頭號哭。公隨師捉禪師脚鳴。二人同聲大叫。啼號涕泣。喚禪師云。阿耶比來在何處。我國。州。覓公不得。今時覓得也。禪師畏人。怪。遂共。50 公隨達摩等作婆羅門語。現在衆中。悉皆不解此語。崇淨寺講攝論大德智達法師。安邑縣攝論。阿相師等。道俗數百餘人。悉皆啼泣。哽。不能自勝。達師相師等數十餘人。僧皆捨名。聞徒衆。四事。願捨三業。隨逐。禪師更不敢用自已見。始知禪師非凡人。五。父山者。五臺也。禪師說。在悲田寺禪院。取欲建立正法。爲凡夫羅刹。僧多恐畏。失命。不敢通法。何以故。羅刹僧諱惡故。捨寺入山。寂靜之。其處號曰百梯。取脩之處。費。55 用功夫財錢物千餘貫。造成即捨。如棄涕唾。在百梯下寺。更造一處。取費功夫。計當千餘貫。其術處。取或有諸州及本土。人或時有千人來。飲食亦足。或時五百人來。麵皆足。畜生。或五百三百。皆悉草粟備足。更不向外求。多時。住亦足。造成。即捨。如弃糞土。聖人無有執着。禪師在虞鄉崇淨寺造一。取計功亦當數百餘貫。造成。即捨。棄之。禪師在安邑縣善根寺說法。迴得。一禪師名。爲造院及術。有爲功德。無有價。

60 量。取術功德之人。皆悉願捨財色五欲。一如十二時行道衆制方法。諸人見者皆悉讚嘆。

取香汁。又擗寶香和土爲。取麻。取沙。爲被紙沙重覆。身心之中。並着寶香種。並皆護淨。其行道之人。皆擊一。中着香。團。喻若把花行道相似。其匠。香者。

依次隨意而取其事。其錄不可周悉。略抄少分爲記。其大像十五日食時成。使者脯時到。65 禪師取。禪師聞像成就。不覺而去。禪師取。爲之處。不作時宜。皆。上好。並悉精華。有。

人。讚禪師。教他捨好房舍。取惡處。取。故。禪師自作好舍。禪師云。此造好者。顯法勝。故。法已勝。此舍雖好。無有。既無。則不懈怠。故能生淨土。此不爲獨已。一身。

爲多人也。教捨本好房者。遠財色之處。既遠財色。則生淨土。惡房者。無床也。既有。床褥。則受欲樂。既有欲樂。能生地獄。是以某惜地獄。不與衆生。有何可。其人更則不。

70 語。有一僧。從京來。讚禪師。唯化俗人。不化衆僧。師是無知。有何取用。禪師即引佛藏經文。爲彼師說末法惡時。但披袈裟一片在身者。一切佛三輪不現。教化不。何以故。貪財愛色。

故。腸肥。脂多。膠粘。深着。樂。癡盲。故。其僧更則不語。又問禪師。不教丈夫行道。唯。教婦女。禪師云。此法合是出家人行。出家人。既不。其法。即。丈夫爲應王役。不得行。出家。

人爲財色。不得行。事窮路塞。無處可。得安。此女人師。有何可。其僧更則不語。禪師即作。75 辟喻說。女人者。喻其癡。癡。者。得生蓮花。女人捨其財色。亦復如是。禪師在汾陰。

說法。感得鳥來聽法。与人同時聚散。訖禪師却還。其時遂有驢及牛數群。走逐禪師。禪師遣住。依聲即住。皆悉鳴喚。直視禪師。在絳州說法。有州司倉姓孟兒。年廿。從生已來。爲癡。父母教遣讀書。一日不得一行。父母恒常贖責。見少精神。羞見餘人。遂即教誦經。

80 二日亦不得一行。言語無有次第。乃見禪師。因即好語。遂索禮佛名誦。不越少時。誦得七紙。合家大小怪此。事已。禪師說。此兒得識。其餘人不識。遂入三乘法堂。六時禮拜不闕。合家號啼泣涕。不食酒肉。夫妻相捨。禮拜不闕。與過去無言。若誦偈。無相異。禪師在百梯寺說法。

其時有一應供僧。着履入仏堂。時有禪師弟子。語彼應供僧云。此堂護淨。要須脫脚。始可得入。禪師聞此語。即記。其夜禪師說法。因事即訶此弟子。汝何故今日見仏入堂。語仏云。護淨種。訶責此弟子。訖。即爲說觀行法。見剃頭袈裟僧者。是仏。見把酒盞者。是佛香爐。見

85 酒氣者。是香煙。見鞋靴者。是蓮華。常作此觀。不須見惡。其僧即慙愧啼號。泣涕懺悔。

禪師在山說法。自云。唯我一人能爲汝作出世大師也。我今教汝。顛捨五欲。送汝到弥勒初會。弥勒若不來。我亦自來。送汝到於八地已上。諸人聞此語。啼號歡喜。禪師午時。諸人消息。向五父山下。語清信女云。此山是我所爲。清信女白禪師。經文說無處不是。若捨身之處。

今日是也。禪師即嘆云。山者是水沫。豈作。壓洪水之處。此之謂也。

90 禪師導。不得將死人衣塔下過。除爲洗染香勳。應當學。死人衣者。破戒死屍也。破戒不合披聖人袈。袞。者塔也。行者若除浣財色。染於聖道。急須戒定惠聞。

思脩香勳。始可得入袈裟之下。應當學。於時則有晋州一僧。返戒還俗也。

禪師常乞食至食家。唯一搗食。更不食餘味。飯醬菜等。知爲一食。主人見禪師年老。驗此惡食。啼泣淚云。閹梨年老。食此惡食。幾許可伶。何由可下。即料理上妙種。飲食供養。禪師不食。唯食自乞得飯食。後。□□主人法。說。禪師。□□唯某一。人不食如上妙供。何以故。是

95 凡夫破戒故。不銷重食。破車無福。不堪運載。佛所禁制。不許破戒。凡夫喫糠。許上妙供。具足。以某破戒。小心。不敢違仏語。故。是以不食。仏說經教。開聖不開凡。更有人見菹菜。初筵將奉。禪師推注不食。殿勤苦逼。禪師即語弟子等。汝等且食。某在後。弟子等不解禪師意。

100 即食。訖。訖禪師即爲說法云。凡。是所貴物。是上貴人所食。某是下。惡衆生。不合食。何以故。一切人食足。殘不用去者。某即取食。弟子等慚愧。啼泣。禪師云。我此法亦復如是。一切人賤。人不用聞者。汝則收取。貴時。賣阿鼻地獄。貴。汝不須爭淨土。人天賤。汝收取貴時。用阿鼻地獄。

貴。人共爭買。取供養。耶。見道俗亦復如是。有人請禪師。說法之處。將飲食供養。禪師云。說法得食。喫者。皆是賣法。是以不食。禪師見應供若少。若小。禪師皆須在先禮拜。不受彼禮。

105 禪師身常不着新好衣服。皆須補破。不着好者。禪師說。釋種之子。意上求道。不好衣服。耶。魔外道心。貪綺縠衣服。攝令光輝。在榮華身。喻利若劍。禪師常不食平旦粥。唯一食。有人勸遣食粥。諸禪師道。食不鄙道。因何自餓。禪師云。若欲脩何故。不觀一粒之米。苦樂之本。耕種之時。及以結果。農夫汗多。米少。氣力皆盡。過去諸佛三大阿僧祇。劫行。苦道時。皆因一粒米。斷惡。脩善。緣。

具不得一粒米禪定不成。禪定不成故心則散亂。心散亂故流轉生死。生死既重即墮地獄。既在三塗云何得出。若捨耶歸正斷惡術善莫問已。物他物並得食用。是以諸佛得聖。故食不邪道。某是破戒。凡夫不得食用。若其數食則長欲情。欲情既長則邪聖道緣。邪道故墮於地獄。以是義

故。某不敢食粥。其人慙愧。有王賢者等五人同京。五衆中學三階佛法。來問禪師邪正法。禪師爲對。同往有一師解行各別。不得說其邪正。五人殷勤起請。遂即說辟喻法。禪師說下舍有一人夜犁去。其人即共妻平草。早与我餉食。莫遲其妻。即語夫主。遣我若爲知時節。其夫即語妻云。你聽雞鳴。其妻即共雞平草。語雞大叫喚我起作食。向其雞導。其夜忽然有一野狐。

115 來向雞房內。野干初入雞房門。開得容身入。竟其門却掩。其野狐則不得出。鷄怕野狐不得叫喚。野狐徹曉在雞房。其夜則失明。不得作食。其犬主從田來語妻。爲何不作食。妻云。我聽鷄鳴。鷄不鳴。其妻被夫瞋責。即入雞房內。嗔鷄。語我導。何故不鳴。鷄則指野

狐。向婦女看。努角裏。是何物。作具。遣我得出。我若出氣。此野狐則嚙我死。是以不得出。今對禪師亦復如是。是爲凡夫諱惡。故是以不得說邪正。說則我滅却。某前車已破。後車湏解。五人禮

拜。慙愧而去。有人問禪師。何故一句語。即得人捨妻及子。禪師即爲說箇語云。噫。噫。何力。車鞅繫。虱得虱咬。車鞅斷。明知弊裏。幾許力。禪師導。某乙從尤始。已來。迄至今日。不敢妄語。所有言說。皆是。自行自學。是以一勾。即捨其人。慙而去。有衆僧譏禪師。何以故。不遣他擅越。設齋供。禪師說。大德等識。濟以不。諸僧不答。禪師即爲說齋法。禪師導。辟如官家國忌及結齋

之日。要湏沐浴。着新淨衣。入其齋室。面向官家助國哀。亦不得制其公事。亦不得歌詠作樂。亦不得向妻房種。皆悉不得。若犯者。則有徒流之罪。流者。合除名。解官。徒者。合徵銅。世間齋法。上合如此。何況出世間齋法。凡夫破戒之身。受人所請。喚者。喻如世間虫狼等獸。意

125 亦不得。向妻房種。皆悉不得。若犯者。則有徒流之罪。流者。合除名。解官。徒者。合徵銅。世間齋法。上合如此。何況出世間齋法。凡夫破戒之身。受人所請。喚者。喻如世間虫狼等獸。意

食求食。被他所窺。中黃櫨木槍。可長五尺。穿坑之內。傍服。安置一猪羊。其聲高鳴者。鳴。其虫狼等。聞此聲。已歡喜而來。其陷被覆。虫狼不覺。弥耳一擲。前行八步。捉彼猪羊。不免

130 坑。坑。心痛苦而死。更將石打。恐畏不死。曳出。被剝其皮。更爲說經作證。又祕要經云。減善之根。名聞。憍。慢之本。又莊嚴經云。諸獸墮。穿陷。皆由貪味。故其味甚鮮少。爲

惡甚深重。行者。未來現在。自思量。深可悲嘆。諸僧十有餘人。聞說。信施之重。返戒還俗。禪師十五日。懺悔。有僧見懺悔人多。即從禪師乞錢。禪師問彼僧云。乞錢何用。即云。普爲

法界衆生。作仏堂。禪師即問彼僧云。作仏堂者。破何等病。爲破貪病。爲破瞋病。爲破癡病。爲破癡病。三病之中。爲除何也。其僧面赤。無言可對。禪師即爲說辟喻。如有人用百貫錢買得

135 一石。糖。油。石蜜。共鳩鳥。蜈蚣。虻。蛇。等同在一器中。和攪一處。得食以不。其僧云。不得。千貫買得十石。共和一處。得食以不。其人云。不得。萬貫買得百斛。共和一處。得食以不。並云。何以故。不得。爲和毒藥一處。故。是以不食。喫者。藥人死。禪師云。今時。凡夫。不斷三毒。循善者。亦復如是。其僧聞此語。懺悔而去。禪師有諸邪見。羅刹神鬼。魔道俗。披。返与我爲害。喻如孩童。拾取土木。着於口中。父母与却。返將爲。今教捨欲亦。

三階某禪師行狀始末に就いて

四四

四四

四四

四四

140 幾許可伶。說是語已。有弟子問難禪師。闍梨既行三階佛法。与過去信行禪師同。以不禪師云。同不別。其僧即說。過<sup>去</sup>信行禪師則剃頭披袈<sup>衣</sup>。□□□□□□□□□□

眼中泣淚。待沒始去。作如此行敬。闍梨今時何故。非他禪師導。某□□□□□□

行。禪師見你凡夫。披聖人衣服。破戒無數。不依聖教。不中与語。十□□□□□

信行生哭淚落。其僧聞此語。返戒還俗。有人譏禪師。闍梨□□□□□□□□

145 導。過去佛捨化之時。患頭瘧。以不其人云。患背瘧。以不答云。種々皆□□□□□□

更則不語。禪師導。今有八州邪見道俗。欲害於我。斂<sup>儀</sup>。儀以得千餘貫。□□□□□□

奏於我。未与之間。誚曲鑿師寶等數百餘僧。斯既事發。是以不得奏。我今不得久住。

今欲更住。還被他言。於法无力。是以不得久住。我湏速脫現在。弟子悲啼號泣。禪師咸亨三

三年六月十三日。禪師喚道場內弟子道俗等。慰問云。汝等依法行道。我去已後。更無人爲師。

150 法是汝師。遂有鑿師與禪師診脉云。極重不堪療治。十四日更看脉乃云。脉大好。卽差。禪師

云。備不識我病。禪師先遣木匠作一八面上員。解合孩童坐車。十四日暫時取生。禪師乃作

孩子之喫舉其兩手。禪師導。我更作一生。放此同異。人々不解。十五日晡時。禪師長嘆息。

吐血已後。由自屏々。似如恒常。十五日沒已後。却坐床。無兩脚。纔<sup>低</sup>。頭平身。左手舉平右

手。狀如說法。不覺而去。弟子扶脚上床。自然合掌。側身右脇而臥。當亡之日。六十餘州道俗萬

155 有餘人。似童兒之失母。送禪師神靈蒲州東山闍提寺。耶田谷大平下小平埴上穿窟捨

身血肉。散及有緣。禪師未亡之日。猶有意悲愍衆生云。我捨命之後。皮穴之屬。陪償無始

已來宿債。所有衆生來食我肉者。皆與作得道回緣。肉盡已後。收取骸骨。以火焚燒。訖收取

擗令作末。好絹羅分作二分。秤秤爲平。一分高山頭。颯一分於我法有信。被屈匿不自在者。爲香

水和末爲丸。男女右皆與一粒。我親身舍利。斯救見聞此語者。悉皆啼泣。此是百梯山中

160 法初起之語。禪師亡後。屍柩常改變。身如真金之色。狀如似金形像之身。上捺<sup>禪</sup>。有

高下。葉々。相次。脇下乳頭香出。亡後。唯着一俗衣。其衣着身。還如真金之色。人々來皆禮

拜懺悔。共觀不見其衣。復作種種。寶香之氣。觸體頂後。有一孔。團圓。宜下可容帽

簪。始知不同<sup>世</sup>。問禪師語。蒲州刺史李冲寐云。檀越佛法。付與國王大臣。在<sup>王</sup>。王九重室

內。不知外事。日月雖明。覆盆難照。清人好人。常被擁塞。諂言易進。忠諫難陳。十方三代

165 莫不以道俗相依。佛法廢興所由。斯則事由檀越。第一五百年。魔波旬王化。三寶於斯沉沒。第

二五百年。旃陀羅王化。聖人即被<sup>殺</sup>。被打盡。第三五百年。羅刹住持。聖人還被<sup>殺</sup>。第四五百年

羅刹神鬼。魔住持。壞滅佛法。斷三寶種。三教俱滅盡。前件滅佛正法者。皆是貪財愛色

耶<sup>邪</sup>。耶見道俗者。是佛法幽玄。叵測。時節則今古懸殊。證者乃能知之。豈開羅刹神鬼魔等。

能知境界。檀越宿植善根。今逢正法。故若高位。抑放。有德國王爲護法。故速成正覺。

170 涅槃經金剛身品是。乃至一切經護法。品具說佛不虛說。刺史聞禪師此語。啼泣雨淚。禪

師云。一有通法人。二有護法人。三有能行人。通法人。禪師是。護法人。李刺史是。行法人。千人之內。當



法者は一乘具足者は禪師咸亨三年六月初。語王基云。我去之後血肉之屬陪償無始已來宿債。所有衆生來食我食者。皆与作得道因緣。肉盡已後收取骸骨。以火焚燒。

175 言颺却。若爲禪師導。我先用伍拾貫錢。覓一人術道爲應。王役資給衣食不可得。一百貫亦不可得。乃至二百貫亦不可得。今時不謂忽然得如許人。聞法修行。此是大不可思議之事。今時若作四分張者。何由得遍。阿誰不与。阿誰不可與。此事不可周悉。今者慙湏揚却。我一塵擬治一生。你能高山頭。楊能不。此是大利益事。王基能禪師導。你今現病。若爲能王基云。△甲今大能。王基甲今病已差。禪師導莫使摸你然。王基云。甲大能上山。闍梨先委。禪師

180 未去之時。其行果白禪師。知闍梨骸骨並悉焚颺却。未來衆生歸依何處。行果意爲闍梨起塔。禪師量久不語。於後云。任。禪師去後二年。諸弟子不識禪師意。遞相關評。准例起塔供養。知舍利之常在。或有隨喜造者。或有不用見聞者。禪師導。浮圖者着死。人骸骨之處。塔者安應化佛骨穴之處。檢尋內外。教自知是生盲貪財愛色。穴眼下根。凡夫自無慧眼。若欲依他行學。不得正望。上不着下。外教云。孔丘被削跡。檝樹者不得看。名相。無識出家耶。見道俗。虛言惡唱。謗毀良賢。自陷。他又如術多羅月燈三昧經說。惡時衆生由貪上嫌下。故無問道俗貴賤。並共他煞聖人善花日。芽斬作八段者。是又如大雲經中說。一切道俗共然持法者。是又法華經中。一切道俗共謗共罵。共打不輕者。是又

185 大集經中。破戒比丘打煞阿羅漢。又涅槃經中。破戒比丘打煞阿羅漢者。是乃至一切經中具說。但使一切真人說法。正人行真。備道人在。處。少不得安隱。何以故。欲令依學之人。識耶知正。故於違順之境。不惜身命。常不退改。今約教驗人。禪師實。堪爲下根貪財愛色。十惡衆生。出世大師。有人譏禪師。教他捨財色。自備畜錢財。何關出家之事。禪師導。某乙凡夫。所受畜財物。皆爲頹棄財色。五欲正見成。狐獨貧苦衆生等。爲應王役資給衣糧。何以故。此人既捨財色。則是出家淨行比丘。經云。出家之人。不合把錢。是故爲畜師。何有可譏。其便云。准內外不合留。□□髮出家。禪師何故喚俗人爲比丘。禪師還引律。向彼師說經律云。王難比丘亦得留髮。

195 此人引多部經文作證。禪師導。且論。弘藏經說。仏導。我不說剃頭。披袈裟者。是比丘。依我法者。則是比丘。則是我弟子。我是此師。不依我法者。我非彼師。又涅槃經文。不依法者。喚作秃人。秃人之背。不得同何飲水。又實梁經云。喚作大賊。又人王波若經。喚作兵奴比丘。此是文義具說。其僧大瞋。又僧云。何停。故俗人說出家人長短。禪師道。仏是大人。何故不避。此是仏說。禪師見瞋。從乞歡喜。禪師語彼僧云。今時既得出家。得具慈悲。某爲一切衆生。畜財入地獄。有何事。其僧即休。禪師語彼師云。某乙所畜財。不自知悉。並是孝基檀越。執知某乙不悉其諱惡。僧摩顏而去。禪師導。破戒無戒等。湏供養。唯持罰耶善持式比丘。有人問。何者名破戒無戒比丘。何者是耶善持戒比丘。禪師導。我法中名破戒無戒。西京道樹之徒。名耶善持戒大。家裏不相關。又人問禪師。今時捨財色。精特戒行。結加趺坐。禪得出世。以不。禪師之不得。何以故。

200 何事。其僧即休。禪師語彼師云。某乙所畜財。不自知悉。並是孝基檀越。執知某乙不悉其諱惡。僧摩顏而去。禪師導。破戒無戒等。湏供養。唯持罰耶善持式比丘。有人問。何者名破戒無戒比丘。何者是耶善持戒比丘。禪師導。我法中名破戒無戒。西京道樹之徒。名耶善持戒大。家裏不相關。又人問禪師。今時捨財色。精特戒行。結加趺坐。禪得出世。以不。禪師之不得。何以故。

不是時故。此坐者則與懈怠懶惰病相應故。持戒執着戒見二趣故。以是義故不破本病。故不得出<sup>世</sup>也。又於時有一阿毗曇論師。遂問禪師。如闍梨<sup>世</sup>種々皆一倍翻不得作者。今時衆生依何法行寂要得出<sup>世</sup>。願闍梨爲說。禪師導。今時寂大要急。疾々出<sup>世</sup>。法門者。先須服四種

吐下藥。七一五不相忤爲丸補。卽得上道。問四種吐下藥何者是。一者除吾我。二者者去是非。三者捨親疎。四者離住着。一若不除吾。我敬人重法行不徹到。二若不去是非。入衆生界不盡。三若不捨親疎。慈悲心不普。四者若不離住着。法界行不立。初地以來<sup>善處</sup>。及博地凡夫皆須一切悉捨。

210 作如斯行始可得出。毗曇大德論師聞此語已。啼<sup>卽</sup>哭不能自止。毗曇論師云。△甲比來作學謂呼。

爲是心中不服<sup>服</sup>一切人。今時始知錯也。遂辭禪師捨名相。返戒還俗。學無相之法。有人問禪師。

着羊裝<sup>把</sup>杷單瓢者。有何意。禪師導。仏法並在破羊裝<sup>把</sup>杷瓢之下。在有三種大益。一者

遮風寒。二者鄙雨雪。三此是內家<sup>破</sup>御服單瓢者。輕用之器具。在儒文。此羊裝大意是第一

義。天寶殿逐身<sup>此</sup>。此是因循。客負者有何意。禪師說。破戒道俗准材力。經隨力<sup>已</sup>財

215 自活之謂也。有人在禪師陰下學法。并及貪財愛色。於中養活身命。造其過咎無數。多

人慊疾。又有同學之人。向禪師<sup>構</sup>搆舉其過惡。禪師聞此事已。卽喚來對問。所訶因事。

種々呵訖。於後卽乞歡喜。更不越數日。又復讒說。欲遣禪師<sup>去</sup>却。離衆類<sup>善處</sup>。導說禪

師語。彼讒人導。我故來救有過之人。無罪者不待我救。何以故。諸仏<sup>善處</sup>得聖。故不須救。凡

夫有惡故。惡須救攝。我若<sup>去</sup>却。却不攝受。取此人在外。更無人遮護。恐畏墮落。若

220 也。墮落幾許可伶。沒在三塗。云何得出期。謊人卽默然慙愧。禮拜而去。禪師付法

与行學弟子。皆遣禁口不言如死人。三業乃至被<sup>殺</sup>打<sup>殺</sup>。千死萬死。億死不得分疎。

種々持罰不得分疎。唯除開口嚼食不在其限。乃至命終必如野獸死。始各得免涅槃。

於其中間。乃不依之人。遂逐其緣識。到彼緣家。爲他說法。乃有人白禪師知甲乙

說法也。禪師聞此語已。卽爲說一箇<sup>世</sup>話。禪師導。昔有一人在外遊行。經於數年。遂

225 卽却還歸家。一物不得。唯學得一箇作賊法。其人外家公乃語遠行人云。你比來在外作

何業行。覓得幾許財物。其外生兒語外家公云。甲乙一物不得。唯學得一作賊法。其外

家公聞此聲已。語外生兒云。你幾能作賊。時我家中有一寶珠。你能偷得。以不。其外

生兒云。深藏着。我能偷得。其夜外生兒卽偷珠去。其老公更不作餘計。唯共妻

230 平章云。今夜中外生兒期作賊。偷我家中寶珠來。共婆若爲藏隱。其外家公語

妻云。我共阿婆今夜同作一頭眠。口中藏寶珠。賊豈能偷得也。阿婆若出大小便

利。去時卽吐着我口中。我若出大小便利。去時還吐与阿婆。豈非罕事也。其妻

云。好大罕。其夜外生兒卽偷寶珠來。遂入外家公床底藏隱。聽得老老語。其

夜外家公急大小便利去。出去已後。其外生兒從床底出來。詐作老公語。從阿

婆索寶珠。其阿婆謂言是老公。卽吐寶珠与外生兒。其人得此寶已。歡喜

235 而去。老公入來。張口從老母索珠。乃云。阿父始將去。其老公聞此語已。更則

不言。今時行學之人在外。開口說法盡已後。并付觀行。與他者亦復如是。並是外生兒偷將去也。對我前並悉似人口云。設犯作誓啼喚雨淚。口云捨身捨命。能當法行。我則取你口爲信。則放不謂在外。並悉造事非一。幾許壞法。喻如師

子身中。更還食師子食。一種相似。禪師下有外州弟子。三年於禪師邊學法。

240 心中不悟。遂則多時。尋讀經論。尋訖。望欲詰問禪師。行至禪師邊。抄手欲語。

未語之間。心中自解。自極怪之。白禪師知云。某申將疑事。欲問閻梨。未語之間。對

閻梨何故自解。禪師云。驛如閻室。見燈自明。一乘大井爲衆生決疑。我不是井。

說此語時。遂即跌地。更復重起云。仏爲衆生決疑。我不是仏。禪師說此語已。小聲而笑。

更則不言。側身而臥。禪師放客負之人。皆遣捨財色。五欲。禪師導客負之法。

245 偏行頽學。得苦得惡。受下受弱。將一條大繩。將一口。俄長八尺。不漏者。成物急閃。

口客負。唯得取食。一升三合米。醬菜柴宿錢等爲定。除此已外。更不許畜積錢。

餘畜宿錢者。違如騾懷任。有子則死。客負之人。畜餘錢。亦復如是。又衣破及王役

所漬者。許別處。客作充其所用。不在此限。客負之法。不得擎酒。及五辛。唯除自身

已外。並是。曹主大家。自餘住盲不識。一々當法者。得免地獄之苦。禪師說

250 五重十惡。禪師云。一者有自知。他不知。十惡。二者有自知。十惡。三者有自他俱

不知。十惡。四者有滅國土。煞衆生。十惡。五者有滅仏法。壞世界。十惡。前三十

惡。決定入十八地獄。後二重十惡。決定入阿鼻。不可得出。深可悲歎。此五重十惡。要親見禪師解。始可得解。禪師語。導唯。正說。不得覆相。經文說。備禪億千劫。

不爲諸仏護。若不隱正法。諸仏速護念。亦須相時。而効知時。故名大法師。仏不虛說。

255 禪師語。備師導。六齋日。自作懺悔。意及與他懺悔。備師云。諸閻梨。万備是凡夫。不合

開口。與他說法。恐畏自墮地獄。今聞正法。願閻梨放万備。脫袈裟。自救。禪師

云。將刀。截我手。截我脚。斷則從你去。當來轉法輪。從何而起。禪師說。有我在。

不須畏。唯須不惜身命。有弟子問禪師。如閻梨先說。常須親近善知識。今時行

人。並悉放行。在外遊行。者若爲禪師云。法依備行者。名親近善知識。不依法者。假使在

260 我懷中者。不免地獄苦之。有一白衣初侍。向禪師處學。苦行不達。遂即王俊出。其

人耶利根。家中貧窮。無處安身。王官不充。誦涅槃經。得一十七卷。受易得誦難

疑。無心力。遂附禪師。聽得少分法。在外即爲未解者。說許言爲影嚮。該誘婦女

小兒。教唱。△甲是不凡。無識者。皆背禪師而走。彼有知者。白禪師知。禪師語。彼

白衣人云。你說法。得食。喫者。何如吞鐵丸。說法得衣。着者。何如焚鐵纏身。你說人墮

265 阿鼻地獄。聽人墮黑闇地獄。五重十惡。何物是種々。訶責其人。羞慙。摩顏而去。其人

名守忠者。是禪師在日別衆。不敢出頭。禪師去後。即逞英雄。詐喚禪師。是我閻梨。徒衆等

皆食財愛色。詐僞者多。詐爲禪師。起塔。傍眞行。僞覓財。養活身命者。是禪師知。義知

法弟子並皆走散而去。西京有一耶邪善持戒僧名曇行。當衆推先有解行。衆徒遣出開講。合朋黨從西向東。從南向北。從北向南從東向西。案行諸州。訖行至禪行寺。許共禪師和光。經於數

270 月停住。自逞解行觀法。向禪師說多聞功能。禪師見說即語。曇行之法脚不似越勾當。今讀

文之人。喻如盲雀傍糝。喙大豆相似。畢竟不識大豆。喙如鸚鵡鳥口云喙。鴉脚一種相似。畢竟不識鴉脚。其僧問禪師此語。顏色不悅。禪師見諱惡。遂遣弟子詳共將護

不与說語。於中遂有不識禪師法之人。遂向彼僧譏。闍梨常問師不爲說法。其曇行

聞此語即發惡心。語禪師。△甲師入闍去。禪師見去。惟禪師語彼僧云。比來不導去。今

275 日忽然云。曇行即出惡語。禪師聞。闍梨何故遣俗人在外。唱爲聖人謗。禪師此語即云。闍

內諸寺大德。比來常欲擬奏闍梨。曇行勸諫不奏。諸僧故遣曇行和會。裂開闍弘法來。

諸僧大嗔。禪師聞此語。摩頂留住。禪師語曇行云。今時一切僧並悉嗔者。若爲除障。曇行

即云。多請師。且讀經。多布施錢。即除鄙氣。禪師云好。待過十五日。訖十六日。讀禪師語弟子等。

我合八月去。今被催促不得住。我今久住於法無力。結氣滿破心。吐血而去。經律論說於末法惡時。

280 一人起大慈悲救拔衆生地獄之苦。乃被羅刹神鬼所惚。禪師忙怕。礙心吐血而死。禪師亦忌

預知前事。大忌自言得聖。亦忌白衣人。与道俗說法。此三種人。禪師決定不許說。者自陷。他盡

禪師判乞食。比丘及比丘尼。皆須一切悉捨盡。捨一切好寺舍。捨一切好僧官寺主等。捨一切好莊

田碾磑。捨一切好家人奴婢。捨一切好驛驢。捨一切好師僧同學。捨一切好和上阿闍梨。捨一切

好門徒弟子。捨一切房好舍臥具。捨一切好輕濡衣服。捨一切好講說。捨一切章疏問答。捨一切綺識

285 文辭。捨一切親捨一切疎。捨一切順情檀越。捨一切六回眷屬。捨一切好有爲功德。一切皆捨盡。唯得

受一切惡房舍。唯得受一切惡臥具。着一切惡衣。唯喫一切惡食。唯受他一切謗。唯受他一切毀。唯

受他一切辱。唯受他一切罵。唯能受他一切打。唯能受他一切棒。唯能受他一切繫閉牢獄。種々持

討遍體歡喜。不得開口分疎。千死万死亦不得分疎。億死亦不得分疎。唯除開口嚼食及柄衆

處。不在其限。亦不得數遊聚樂。數往生緣。弔死問病。亦不得大寺往來。唯除家次門次

290 次乞食者。不在其限。亦不得超越毗隣。望面逐情。簡擇貧富。受下受弱。無病不得輒尔

食粥。常在仙堂行道。三業瑱屬一切善知識。永不用自己見。能當者判屬天攝。若不能一

當法。門徒不斷絕借貸往來。不能捨盡者。判屬阿鼻地獄。或入十八地獄。攝不定。此是

畧抄。不可具錄。 禪師判乞食。男兒及婦女人等皆遣瑱捨切親。頓捨一切疎。瑱捨

一切道。瑱捨一切俗。瑱捨一切富。瑱捨一切貴。瑱捨一切勢力。勝他。瑱捨一切好有爲功德。瑱捨一切

295 自。瑱捨一切他。瑱捨一切樂。瑱捨一切好衣服。瑱捨一切好飲食。瑱捨一切好舍。瑱受一切貧。瑱受一切

賤。瑱受一切苦。瑱受一切下。瑱受一切弱。瑱受一切破衣。瑱喫一切惡食。瑱受一切謗。瑱受一切毀。瑱受

一切辱。瑱受一切枷禁牢獄。被煞被打打種々持討不得分疎。千死万死億死亦不得開口分疎。舉

體歡喜。唯除家次第門次乞食。開口嚼食。不在其限。唯頓受一切寒。唯頓受一切熱。鳥糞露

宿。乃至命畢如野獸死。一當法者判屬種性攝。若不能一當法者。或入阿鼻十八。不定觀

300 行在外。禪師在蒲州爲悲田寺造禪師院時於蒲州城西盟津河頭買木左膊上着錢

廿貫右膊上着錢廿貫於袈裟下覆着人々不見於木棧跳上過向一箇楸上看木復於河中

復更跳向一箇木楸上看木好惡共木主平章欲買木其木主語禪師云不見師一錢何須平

章買木事禪師即語木主云檀越但共平章和合莫愁無錢其木主平章木價

和合即跳上岸上於左右膊上袈裟下脫錢冊貫文着地還木主其諸人等莫不

305 驚愕衆人觀禪師力非是世間氣力此是佛力神通。禪師行向絳州日絳州城內及四遠

道俗若老若少万有餘人皆嚴持香花於黃檗迎禪師亦有諸方行人普皆歡悅禪師慰

問共語唯二女人禪師行亦在路左迎禪師不共語亦不慰問二女人頂禮懺悔自持自罰從

禪師乞歡喜禪師語云汝何爲於諸方行時作罪過二女人啓闍梨實不省有過禪師語云

汝作過何因向某諱好自三思即有女一云自辭闍梨去來三年實不敢開口隄語日唯一食

310 唯自憶八月棗發時於他棗樹下未午時以前私取他一顆棗喫向闍梨啼號悲泣自首

懺悔更一女還云自辭闍梨去來三年自省至乞食家爲他主人抱孩兒一過從闍梨發

露懺悔悲啼號泣不能自已從闍梨乞歡喜禪師善汝能如此自發露更莫如此還攝

受放行別來三年有微毫罪過遠知訶之此道俗二位粗抄少分並在當根破病

藥第一卷具說盡。備考 本文の句讀は筆者の施したもので、□は本文中缺逸せる部分、行左の波線は原文の文字上に施された削除の線を示す。

三階某禪師行狀始末 本文第一行乃至第十六行

進士進習三教之士比夫士演說十二子之義莫如起明探微依言於百代  
速心皆有此教乃釋規之無上之妙如兵卒未者矣和於三教之文見於天  
法中實謂當塔石五階悉於下根觀空有二見成就衆士等爲大善知識出  
此也可於然者如禪師自云平治七年有自覺理非智慈衆主慈行徹到  
禪師於平十有三過思以去垢色求竟道俗自者自於家過觀無有不  
教他衆主作出世行也 禪師說我平十有五人向衆主心中人不必先則知衆主  
情在地獄 禪師說我平廿世見諸禪師皆由時論師等皆云隨道悉不知見時  
教他人至悲錯行學無有人和考和教和時普能普也 別解別行能道已者  
禪師說我時以名大法師當今不是行解脫禪之多聞牢固三教之特可以故時第  
已過故唯須捨五欲色行福德牢固無名至相坐禪乃根本 禪師說我昔  
已未常乞食不應供不食僧食自爲緣爲僧家官事啣一頓僧復活米一百世在  
禪師說我昔生已未教衆主及自己身不讚詠法不後世信文章 禪師說我爲惡田  
造房廊堂舍無有不助你唯獨一身文造禪院一切苦生計用人功教千餘貧不  
然一年並志成其錢自主 禪師說在禪院而不教說法日身唯爲衆生行道當  
行道 時見諸境界在境界之中見諸比丘時時散坐化如散坐植竹地獄 禪師

三階某禪師行狀始末

本文第二百三十七行乃至第二百五十三行

不憚方扣姜素一氣吹... 循善者亦復如是其僧聞此語懺悔而... 崇正與我為言喻如孩童極取士... 此許可憐况是吾已有弟子固難... 不憚師之同不列其常助祝也

眼中位後信以始去以此行... 行禪師見你凡夫故聖人衣服破... 信行生矣汝法其僧聞此語遂... 甚道玄仙檢化之時惠顯應以不... 更則不活 禪師遂令有口相... 奏於叔子與之聞痛由聖師實人... 今欲更位遷教他嘗於法死力是... 三年六月十三日禪師喚道場... 是世所止不望師與禪師欲之... 去你不誠我病禪師老甚不... 孩子之吹舉其面于禪師... 吐四已以由自呈一似如恒常...

三階某禪師行狀始末 本文第二百七十七行乃至第二百九十三行

云多請師度波經多布施錢財深耶氣憐憐之好得過十五日說十百號禪師語弟子等  
 我今日去今秋准便不得使我今久住於此要力結無滿故口吐血而多任律論況於末法惡時  
 一之起不慈悲救拔眾生也彼之若乃欲渡佛神志行路極難之怕解心吐血而九 禪師某志  
 預知前事大忌自言得與六世心心道說此三教人禪師以定不為死 者曰而地處  
 禪師判乞乞及此丘及皆與一切悉捨捨捨一切好寺舍捨一切好僧舍六三茅捨一切好  
 田產雜捨一切好三人人好捨一切好心願捨一切好妙法捨一切好如上一切閣閣捨一切  
 好門徒弟子捨一切好房舍舍以具捨一切好能捨衣服一切好謀說捨一切章疏問答捨一切好  
 文錢捨一切好捨一切好情權捨一切好色香聲名一切好捨一切好德一切好捨一切好  
 受一切好房舍唯得受一切惡臥具者一切惡衣唯得受一切惡食唯得受一切惡唯得受地一切惡唯  
 受地而得受地一切惡唯得受地一切好唯得受地一切好唯得受地一切好唯得受地一切好  
 罰遍教教喜不得開口至九百九亦不得口誅傷死亦不得口誅唯得開口嚼食及拘衆  
 象不在其限亦不得教誨衆衆教誨生後帶死問罵亦不得大寺往來唯得來寺門前  
 次乞食者不在其限亦不得教誨此佛至面情簡樸矣當云下至到惡况不仔細  
 公別字在仙堂行道三業頓獲不苦不惱不不自見能苦者判屬天福若不此一  
 勞苦門徒不斷施僧僧往來不修善畫者判屬阿鼻地獄成人之地獄攝不在此是  
 三階某禪師行狀始末

京城帝國大學文學會論纂 第七輯

史學論叢

岩波書店刊行